

〈資料紹介〉 谷謹一郎と巴里万国博覧会 : 谷 謹一郎巴里万博日記

岩壁, 義光 / IWAKABE, Yoshimitsu

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

86

(発行年 / Year)

1985-03-24

△資料紹介▽

「谷謹一郎と巴里万国博覧会」

△資料▽ 『谷謹一郎巴里万博日記』

目次

- 一、はじめに
- 二、谷謹一郎略伝
- 三、『谷謹一郎巴里万博日記』と谷の西欧評
 - (一) 『谷謹一郎巴里万博日記』について
 - (二) 谷謹一郎と西欧評
- 四、結びにかえて

△資料▽ 『谷謹一郎巴里万博日記』

一、はじめに

第三回パリ万国博覧会は、明治十一年（一八七八）五月一日から同年一月一〇日（当初の予定では一〇月三十一日）までの一九四日間、パリ西北セーヌ河南岸のシャンド・マルスと北岸のトロカデロの両地を会場として、三六カ国五三、六三五人の出品者と、延べ一六、〇三二、七二五人の見学者を得て開催された。¹⁾

日本の万博参加は、慶応三年（一八六七）第二回パリ万国博覧

「谷謹一郎と巴里万国博覧会」（岩壁）

岩 壁 義 光

会に徳川幕府がナポレオン三世の招請を受け水戸藩主徳川齊昭の第十八子昭武以下二六人を派遣したのに始まるが、明治政府としては明治六年のウィーン万国博覧会参同をもつて嚆矢とされ、この度のパリ万博への参同は同六年のイギリス経常博覧会、同八年のメルボルン万国博覧会、翌九年のフィラデルフィア米國独立百年記念万国博覧会に続くものであり、国内的にも同一〇年に東京・上野公園で開催された第一回内国勸業博覧会の余韻を引く参加であった。しかしながらその参同規模は決して大きいとは言えず、参同経費からみてもウィーン万博の五七万三千円余、フィラデルフィア万博の二九万円余に対して一八万円余であり、一、九八九平方メートルシャンド・マルス会場と四〇平方メートルと「頗ル狭隘」であつたトロカデロ会場とに陳列された出品についてみても、パリ万博出品者二六二人の出品した四五、三一六点の出品物のなかには、前年の「内国勸業博覧会へ排列セシ物品ヲ以テ之ヲ出陳」した例も少なからざる数に上つたようである。²⁾

こうした背景には、参加準備期にあたる明治一〇年が維新後最

大の士族反乱であつた西南戦争に終始し政治的にも経済的にも極めて困難な時期であつたことが挙げられ、また同年四月に勃発した露土戦争の成り行き次第では仏国の参戦の可能性も否定しきれず開催自体にも若干の懸念があるといった外的要因も加わつて、日本の万博準備は遅々として進展をみなかった。

このような困難な状況のもとで準備され参加した万博の全容は今日あまり知られていない。その理由のひとつとして利用し得る資料の質量両面の限界性を指摘できる。

例えば万博の全容を知る上で不可欠な資料として博覧会事務局編輯の報告書がある。しかし先述したように困難な国内問題を抱えての万博参加は経費面で非常に多くの制約を課し、報告書に關しても従来は質量ともに豊富であつたのに対し、本万博報告書は「本省経費金格別減少随テ事務官モ人数少ナキニ付如此編述多項ニ涉リ候テハ却テ完全ヲ得サルノ掛念有之候間今回編述順序ハ該会開設ノ趣意ヲ起源トシ閉会ニ至ルマテノ景況ヲ綱領ト為シ所謂首尾一貫敢テ他岐ニ涉ラス編輯列叙候事」に決定され、従来の報告書を一面で特徴付けていた見聞録的性格は極度に抑えられる結果となつた。このため報告書自体は簡潔化され編輯物としての性格が色濃くなつたものの、博覧会参加に至る事情や開催中の事務局の活動、とりわけ博覧会に關与した人々の該地における活動が公にされず、博覧会参加によつて与えられた直接間接の日本への影響を知る上で多くの研究課題が残されることとなつた。

一方、史的事実の解明に欠くことの出来ない個人資料も少なく、「侯爵松方正義卿実記」や「前田正名自叙伝」などのほか、関

係者の伝記に若干の記載をみるのみで、こうしたことが明治一年のバリ万博研究の進展を大きく遅らせていたことは否めない。

以上からみて、ここに紹介する谷謹一郎の欧州滞在日記と付属の資料は、量的には短いながらも従来知ることの出来なかつた仏国における博覧会事務局周辺の人々の動向や大蔵省造幣寮の官吏であつた谷の目からみた欧州事情など見るべきものは少なくない。

二、谷謹一郎略伝

谷謹一郎⁽¹⁰⁾は豊後国佐伯藩士谷永祚の長男として嘉永二年（一八四九）八月二三日に誕生したが、谷家はもとと泥谷姓であつたものを東京に出てから改姓したというから、これに従えば正確には泥谷永祚の長男と呼ぶべきであらう。号は朝軒と称したが、これとは別に空谷山人、簾邱等の号も用いていた。また父永祚は岡山県大書記官を勤めた人物であつた。

学問は幼くして漢学者広瀬淡窓の弟子秋月橋門に師事、父の師ということもあつて永祚と共に学んだようである。漢学は勿論のこと詩を善くし書も巧みであつたという。明治二年東京に上り、文明開化の潮流のなかで英書の研究を志して慶応義塾に入塾、二年余の間福沢諭吉に就いて学んだ。おそらくこの時期に後日財界人となる彼の素地が築かれたのであらう。

明治六年大蔵省に出仕、翌七年の官員録によれば造幣寮出仕として月給四五円の官吏となつてゐる。因みに当時の大蔵省は大蔵卿大隈重信の下にいわゆる大隈財政を展開し始める時期であり、

明治一年のバリ万博に谷が随行することとなる松方正義も当時三等出仕であり租税頭を勤める時代であった。

その後も谷は引き続き造幣寮に出仕し、明治一〇年には造幣寮三等属に昇進する一方、私的には谷家の家督を相続している。さらに同年一〇月二三日には今回の資料紹介となった日記の「仏国博覧会事務取扱」⁽¹²⁾として仏国派遣が決定されている。ただ問題なのは今回の派遣に関してなぜ多くの大蔵官吏のなから谷が選ばれたのかということであり、後日関係が極めて密接となる仏国博覧会副総裁（のち事務官長兼務）松方正義が何らかの関与をしたのかということである。しかし、この点については筆者の努力不足もあって現段階では明らかにすることはできない。⁽¹³⁾

さて、明治二年仏国より帰国後大蔵省に出仕していたが、同一四年再び欧州への視察旅行へ出発し、帰途清国に立寄って要地を巡遊、翌一五年に帰朝している。これと前後して彼の大蔵省内に於ける地位も次第に安定したものとなり、明治一九年三月九日には内閣制度実施後初の蔵相となった松方正義の秘書官に任じ、⁽¹⁴⁾名実共に松方の手足となって活動することとなった。

その後大蔵省を辞し、明治二六年七月日本生命保険会社に関係して相談役に就任、翌二七年一月から同三〇年五月まで取締役、⁽¹⁵⁾次いで東京支店長を勤め、のち大阪に転じて共同銀行頭取など要職を歴任した。さらに明治三〇年六月一九日特殊銀行として日本勧業銀行が創設されるに際して「地租の神様」と称された有尾敬重（大蔵省主税官）や片山遠平（元農商務省官吏）などと理事に就任している。⁽¹⁶⁾周知のように同銀行は農工業の改良発展のための

資金供給を目的としており、不動産抵当による年賦貸付や定期貸付および公共団体への無抵当貸付を行わんとする松方正義の構想が実現したものであり、設立委員を含め役員人事には首相兼蔵相であった松方の意思が色濃く現われていたとされている。谷はこの理事を明治三年六月一八日まで勤め、ついで翌一九日より六才で病死する大正三年（一九一四）一月八日までの期間、監査役として活動したのである。⁽¹⁷⁾

またこの間、富士製紙会社取締役、川崎造船所取締役を歴任する一方、明治四三年松方家が中心となって創設計画を進めた東海生命相互保険会社の社長に就くなど、終生松方と親密な関係にあったことは特筆すべきことである。⁽¹⁸⁾

こうした関係が先述したように何時頃から形成されていたのかは現在のところ不明であるが、谷の日記にも「曩キニ余カ東京ヲ發シテ以來、常ニ公ニ陪隨セリ。故ニ公ノ説ク所ト公ノ論スル所ト常ニ能ク耳底ニ充塞ス」と語っているように、このバリ万博に同行したことが谷をして松方へ急速に接近せしめる結果を導いたとも考えられ、また松方にしても大蔵官僚として成長しつつあったこの時期に初めての海外経験と共にした谷に対する親しみもあったと考えられ、いずれにせよ後日の松方と谷との関係をみる上で明治一年のバリ万博が大きな影響を与えたことは疑う余地がない。⁽¹⁸⁾

三、『谷謹一郎巴里万博日記』と谷の西欧評

(1) 『谷謹一郎巴里万博日記』について

「谷謹一郎と巴里万国博覧会」（岩壁）

『谷謹一郎巴里万博日記』は滞在日記として便宜的に総括した標題を付したが、内容的には日記史料と仏国博覧会事務官長カラント氏関係史料とから構成され、⁽¹⁹⁾両者とも無表紙無外題である。前者の日記史料は内容的に「巴里ノ部」「竜動ノ部」「白耳義・和蘭ノ部」の三部から成っており、いずれも「少有高」片面一二行野紙に墨書きされ、多くの添削が施されている。

「巴里ノ部」は三月三〇日から四月三日までの日記で、三〇・三一兩日のパリ見物を中心記事である。松方副総裁以下博覧会事務局渡仏組のほとんどは三月二九日パリに到着し、日記によればこの日より三日間休暇とあるからこの見物はその間の出来事となる。

「竜動ノ部」と「白耳義・和蘭ノ部」は、八月に入り博覧会も開期半を過ぎて繁忙を極めた事務処理も一段落するなかで松方と谷は九月末までイギリス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイスの各国を巡遊するが、この間に書き残した一部がこの旅行日記である。

「竜動ノ部」は渡英していた副総裁の命令でロンドンに渡った八月二日からパリに帰る五日までの日記で、本史料中唯一の表題である「龍動記」が付されている。

この「竜動ノ部」は、松方らが渡英中親交を結んだ来日経験者や知日家との接触記事が中心であるが、谷が渡英する直前まで訪英していた日本海軍軍艦清輝の記載もみられる。軍艦清輝は「実地研究之為メ凡十ヶ月間之見込ヲ以テ欧羅巴回航」⁽²⁰⁾していたもので、碇泊した各国の港のいくつかで公開されていたが、特に英

国では今後の日英関係を考慮した上野景範公使の保薦によりテムズ河を溯り公開され、該国人の話題を攫った。この時期、万博のみならず多面的な外交が展開されていたことが知られる。

「白耳義・和蘭ノ部」は、八月一日から一九日までの本史料中最も長い日記部分である。

谷は松方、アレキサンダー・シーボルトと共にブリュッセル、アンベルス、リース、そしてハーグ、スケープニングを巡っているが、特にアンベルス市内見学に同行したベルギー人J・マンとの接触には注目したい。

日記にもあるようにマンは前田正名の友人であり、日本の直輸出を支持していたが、この点直輸出を積極的に展開せしめんとして三井物産会社のパリ支店開設に深く関与した松方との交流は、前田の仲介があったとはいえ以後の相互理解を深める上で大きく貢献したと考えられ興味深い。⁽²²⁾現に明治一五年マンは大藏卿であった松方宛に『和欧貿易意見』を提出して直輸出論を展開している。

仏国博覧会事務官長カラント氏関係史料は、同氏を紹介した「仏国事務官長カラント氏略歴」と松方副総裁の要求に応じ日本に於ける鉄道施設に関してのカラント氏の意見を松方との対談としてまとめた「カラント氏日本鉄道施設論」とから成る。

「仏国事務官長カラント氏略歴」にはば同氏の人となりはい言い尽されているが、ここでは英国紙にパリ万博関係記事の一部として掲載された彼の略歴を肖像画は省くが紹介しておく。

The head of the French Government Commission or the

Management of the Exhibition is M. Krantz, whose portrait here greets the eyes of our readers. He is an eminent civil engineer, who was trained in the Ecole Polytechnique, and the Ecole des Ponts et Chaussées, about forty years ago. As chief engineer of the Grand Central Railway of France, he gained a high scientific and professional reputation. He was employed to design and superintend the construction of the Exhibition Palace of 1867, in accordance with a plan for the classification and division of its contents, which was generally approved. Since 1868 M. Krantz has been much occupied with projected improvements of the navigation of the Seine, by means of locks, which should enable large vessels to reach Paris from the sea. During the German siege of Paris, in the winter of 1870 and the first months of 1871, he rendered good service to his country by directing part of the works of fortification round the capital, especially at St. Denis; and, further, by contriving and applying a method of converting the useless railway locomotive-engines into steam-engines for the working of corn-mills, and for other useful purposes. He was elected in that years, by more than 100,000 voters, to sit in the National Assembly. He was now a seat in the Senate, conferred upon him by the votes of his former colleagues in the popular branch of the Legislature.

(THE ILLUSTRATED LONDON NEWS, Aug. 3, 1878, p.

「谷 謹一郎と巴里万国博覧会」(岩壁)

113)

「カランツ氏日本鉄道施設論」は、若干の語句上の相違(例えば「鐵路ノ憲法」→「鉄道法案」)はあるが「侯爵松方正義卿実記」巻七にはば全文が収録されている。しかし両史料を参照すれば分かるように前者は松方副総裁の「……拙者滯留中今一度は是非御面會致シ……」で会見を終えていることになっているが、後者には短い続きの部分があるので次にあげておきたい。

三度目の会見を松方から申し入れられたカランツは、自からの高齡を理由に「再会期シ難シ」として話題を対清対露政策に転じ、「貴國ハ支那ト隣接ス而シテ支那ハ大國ニシテ四億ノ人口ヲ有シ世界ニ於テ申分ナキ地利的位置ヲ占ム殊ニ其民性ハ儉約ヲ主トシテ勤勉ナリ若シ豪傑ニシテ輩出センカ如何ナル大事業ヲ成サンモ知ルヘカラス故ニ対支政策ニ関シテハ今日ヨリ宜シク御熟考アルヘク且又露國ハ領土ノ拡張ノミニ汲々タルヲ以テ決シテ油斷アルヘカラス」と結んだのである。この発言はアジアの小国日本の将来を案じての忠告であると同時に、欧州知識人の日本観を象徴するものと考えてよからう。

(2) 谷 謹一郎と西欧評

最後にバリ万博を契機に欧州各地を巡歴した谷の各国評と、そこから浮び上ってくる谷の人物像について考えてみたい。

谷が初めて経験した欧州のうち、最初に大きな衝撃を受けたのは西欧文明の中心とも言うべきパリであった。彼自身「真に是れ世界の樂園⁽²⁴⁾」と評したパリにあって、シャンゼリゼの繁華なことには特に驚嘆したらしく、日記にも「外國行旅ノ客一タヒ此地

ヲ過クレハ皆眩目落膽セサルノ人無シト……(略)……凡ソ一歳ノ内極寒凍雪ノ時ニ非サルヨリハ、府下ノ人貴賤無ク貧富無ク、老若男女閒遊散步、肩摩雜沓、車馬絡繹織ルカ如シ。日曜安息ノ日ノ如キハ車馬ノ聲萬雷地ニ轟キ、深更ニ至ツテ止マス」と記している。文明開化未だ日浅い日本から渡航してきた谷が、「行游日々抛筆去 觀光一部未成書」とバリ見物の印象を「巴里府雜詩」(26)として漢詩に歌っているのは、この間の彼の印象をよく表わしていると思われる。

しかし、谷は咲き誇るバリの文明が容易に打ち建てられ守られて来たとは考えていない。ベルギーのアンベルス城郭見物の際にも同じことが言えるが、文明はその国民の不断なる防衛努力、すなわち「周囲ノ城砦ト十六所ノ砲礮」を設け多くの血を代償として守られてきたことを間接的ながら強調しているのである。

さらに、谷はこうしたバリの姿を東京に投影して次のように述べている。東京は「萬國交通」時代の適地として「堂々タル大都ニシテ帝王ノ都スル所」であるが、「堅砦無ク、敵ヲ禦クノ強敵」も無い。このような無防備に近いなかで「長ク帝王ノ都タラシメハ、則チ宜シク強堅砦ヲ作り以テ不虞ノ變ニ備」えるように防衛面の充実を図るか、または「默然帝都ヲ遷シ、東京ニハ單ニ政府ヲ置キ以テ貿易交際ヲ行フノ都府タルニ過キサラムル」しかない。しかし日本の現状から考えて後者の遷都論を選択せざる得ないと結論付けるのである。この主張は「遷都ノ事聊カ鄙見アリト雖トモ今爰ニ陳セス」としてそれ以上の展開がなされなかったのは残念なことだが、防衛機能を満足に持たなければ「帝都」と

しての資格を有しないとする彼の考え方は、さらに一歩進めて軍備の脆弱な国家は独立を保ち得ないとする当時の国防意識に通じると考えられる。

次に日記の舞台となる英国について、谷は各地を巡っていないこともあり記載は少ない。そのなかで目を引くのは「ソースケンシングトン」博物館の記事である。この博物館は岩倉使節の『米欧回覽実記』にも「ケンシントン」の博物館として紹介されているが、谷は自らが万博の事務取扱として渡欧していることもあってかロンドン万博を機に建設された同館について注目している。なかでも彼が特に留意したのは、この館が「技藝學術ヲ進歩セシムル」専門技術の教育機関であることであつた。こうした品質向上を含めた技術発展への不断な努力によって、英国が世界の工場として資本主義の一等国なり得たことを学んだのであろう。

しかし、谷は工業国英国の強大さをみる一方で、資本主義の影の部分をも見逃がしてはいない。「電動府雜詩」(28)と題する漢詩は「強富名通天下著 貧窮民比首都多」と資本主義のもたらす階級的矛盾について注意を向けており、ここに殖産興業政策を大前提として工業化を推進する日本の将来に対し危惧を抱く谷の直感ともいふべきものを感じざるを得ない。

白耳義と和蘭については、欧州生活もかなり慣れた時期であり、また松方に随行しての巡行ということもあって前の二国とは異った欧州観をみせている。

白耳義について、特にセアン村の製鉄工場見学では白耳義の製鉄生産が「近時英國ニテ外國ノ爲メ鐵道線ノ製鉄大ニ減少」せし

めた原因を作ったことを知り、鉄・石炭など原料の自給により小国でも充分工業化の可能性のあることを認識すると同時に、アンベルスの壮大な国立銀行や港湾施設などの見学から産業・経済を発達させることで小国であっても欧州の強国のなかにあつて活路を開いていけるとの考えに至つた。しかも注目すべきはこうした産業・経済の発達をもたらした社会の平穏は、白耳義・和蘭にみられる国民の節儉と質朴とに因るというのである。「武魯勢耳府」と題された漢詩に「儉勤成俗真王道 築鑿全工乃霸図」⁽²⁹⁾とあるのは、このことを端的に物語っていると言えよう。

谷は概して大国である英・両国に比べ白和兩國を節儉と質朴の国として好感を抱いているようだが、節儉と質朴こそ正に谷が属していた近世武士階級の基本思想の一翼を担うものであつたことを忘れてはならない。この意味から言えば、多くの士族同様谷の思想構造そのものが近世的世界観から充分に脱しきれていなかったものと考えられ、改革志向そのものも決して所謂近代思想に根差したものではなく、むしろ近代天皇制国家形成期の一官吏として近世から近代への過渡的性格を如実に表わすものであつたと言えよう。

一例を挙げれば、谷が非常に好感を持ったブリュッセルの印象のひとつとして道路について次のように述べている。すなわち「街衢ノ道路太タ廣カラスト雖トモ亦能ク整頓セリ。道路ノ狹隘ナルハ人ノ往來ニ、或ハ雜沓ヲ極メ不都合ナルカ如シト雖トモ、商賈上ニ取りテハ甚タ便利ナルモノナリ」と。これに対し「巴里府中ノ如キハ道路頗ル廣キニ過キ、來往ノ人ハ皆自カラ散歩ノ氣

象ヲ帶ヒ、物品ノ購求等ニハ自カラ不便ナルノ勢アリ。我銀座通改正ノ道路美ハ則チ美ナレトモ、稍巴里府中ト觀ヲ同フ」として、広すぎる道路を「商賣上」の見地から間接的ではあるが批判している。その一方、パリやブリュッセルの鉄道馬車についてはその有益性に鑑み、「馬車鐵道ノ如キ之レヲ今日我東京府下ニ設クルハ、又有益ノ一ニシテ決シテ猶豫ス可カラス」と、東京への鉄道馬車施設の急務を説くのである。ところが、東京への鉄道馬車施設については、明治六年八月横浜商人高島嘉右衛門と林和ひとが連署して米国製鉄道馬車を導入し、新橋・浅草雷門間と九段坂下・兩國橋畔間の開設を東京府に上請した際に、「市街狹隘なれば如此營業大ニ危險の虞」⁽³⁰⁾ありとして却下された経緯があり、実際には鉄道馬車の施設は道路拡張と密接な関係にあったのである。

このことからみて、谷の都市観は一面で近代商業都市のもつ機能を充分に理解しているとは言いがたい。

また、政治思想についても同様なことが言える。

谷は英・両国の成し得た近代化が市民革命を通じて完成されたことを充分に理解していない。例えば、先に引用した「巴里府雜詩」の一節にも「輕々會弄民權去 今日無人奉至尊」として華々しいパリ社会を一面では「嘆ずべし嘆ずべし」と評している。ここには欧州の近代、特に英・仏の近代化が市民階級による王制との階級闘争のなかで形成されたことへの理解はみられず、むしろ市民革命思想を範とする自由民権運動の日本における急速な台頭を懸念する彼の立場が前面に押し出されていると考えられる。しか

し、これは谷の反動性を強調するものではなく、岩倉使節団同様、近代欧州社会から学ぶべきものとそうではないものとを自からの体験を通じて選択していこうとする近代天皇制国家形成期の一官吏としての谷の歴史的限界性によるものと考えるべきであろう。だからこそ文明開化にみる日本の社会変革についても、「熟ラテ考フレハ、文學・政治・藝術等ヲ除キ風俗又ハ慣習ヲ輒スク改ムルハ其弊輕噪ニ流レテ言フ可カラサル禍害ヲ招クノ恐レアリ」と述べ、日本固有の風俗・慣習を大前提として自からが選択した欧州文化の導入によって社会変革を図ろうとする谷の姿勢がここには良く現われている。

四、結びにかえて

万博日記にみられる谷謹一郎は近世的世界観を内包したため歴史的限界性の制約を受けてはいたが、近代天皇制国家の形成期に渡欧した一官吏として実体験を通じ欧州文明を捉え将来の日本を模索し続けたのである。

また、パリ万博を契機に形成されたと考えられる谷と松方との交流はそれ以後の松方の人脈を考える上で重要であるばかりか、万博を契機としたこの両者にみられる交流形成のパターンは近代史上の人的関係を研究する上で大きな意味を持つと思われ、その意味からも今後万博研究の果す役割は大きいと思われる。

註

- (1) 「巴里在留公使報告書」第四号、明治十一年一月一五日
 日『公文録』2A-10-③2458, M③319, 〒イヲロコ4

※③288)。

- (2) 仏国博覧会事務局編『明治十一年仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書』附録第一(明一二)。
 前掲『明治十一年仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書』第二篇(明一二)二三頁。
 (3) 「内務卿第三回年報」自明治一〇年七月至同一一年六月(明一一)四六頁。
 (4) 「仏国博覧会報告書編輯方法ノ儀上申」明治一〇年九月十四日『公文録』2A-10-④2057, M③260, 〒イヲロコ4※1225)。
 (5) 前掲『明治十一年仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書』は「第一篇 博覧会総説」「第二篇 日本部」「第三篇 外国部」と、同報告書附録として「第一篇 博覧会場図並諸一覽表」「第二 仏蘭西農商務省職制一斑費用決算表附」および「明治十一年仏国博覧会出品目録」とから成っている。
 (6) 内務省博覧会事務局関係文書は東京国立博物館に所蔵され、現在整理が進められており遠からず利用が可能となる。今後この分野の研究の進展が期待できる。
 (7) 藤村通監修『松方正義関係文書』第一巻(大東文化大学東洋研究所 昭五四)。
 (8) 『社会及国家』一二二号・一二三三三(昭一二)。
 (9) 谷謹一郎の伝記は現在未刊。論文としては兵頭徹「松方正義の滞欧期における経過と分析——谷謹一郎『明治十一年滞欧日記』を中心として——」(大東文化大学東洋文化研究所『東洋研究』七三、昭六〇)がある。また彼の事蹟を記した事典類が数種刊行されているので記しておく。五十嵐榮吉編『大正人名辞典』(東洋新報社 大

- (三)、大日本人名辞書刊行会編『大日本人名辞書』三(内
外書籍 昭一二増訂)、稲村徹元編『大正過去帳』(東京
美術 昭四八)。
- (11) 『掌中官員録』全(西村組商会 明七)一三三。
- (12) 明治一〇年一〇月二五日後務省宛仏国博覧会事務局第三
百九十三号通知(外務省記録『仏蘭西国巴里開設万国博
覧会ニ帝國政府参同一件』譯海峽 3-15-37)。
- (13) 註(7)で指摘したように今後博覧会事務局史料の利用
が可能になれば、人員派遣についてより多くの点が明ら
かならう。
- なお、派遣人員の問題を含めてバリ万博への日本の参加
の諸問題については拙稿「明治一年バリ万国博覧会と
日本の参同」(『神奈川県立博物館研究報告』人文科学第
一二号 昭六〇)を参照。
- (14) 『官報』明治一九年三月一〇日号。谷はその後従五位勲
六等に累叙。
- (15) 『日本生命株式会社五十年史』(同社 昭一七)七四五頁
～七四六頁。
- (16) 日本勧業銀行調査部『日本勧業銀行史』特殊銀行時代(同
社 昭二八)一五四頁。
- (17) 谷の墓所は東京都大田区萩中の真光寺、戒名は東光院釈
明德朝軒居士。
- (18) 谷のほかバリ万博に事務取扱として渡欧した外務一等書
記生平山成信も、後日松方蔵相の秘書官として谷と行動
を共にしている。(彦根正三編『改正官員録』甲 明二
二、二六丁)
- (19) このほか日記を書く参考とした内務省野紙のメモが残さ
れているが、日記部分と重複が多いため今回は除外した。
- 〔谷謹一郎と巴里万国博覧会〕(岩壁)
- (20) 「清輝艦歐羅巴へ回航同」明治一年一月一日(『公
文録』2A-10-⑤2105、M⑤268、マヤクローネ 昭五
23)。なお清輝艦訪欧については国立公文書館蔵『明治
十一年清輝艦報告』全(2A-33-5-⑤1475)参照。
- (21) 明治一〇年一二月、松方は内務省勸農局長として三井物
産会社のバリ支店開設を援助するため、官営富岡製糸場
の製品について便宜を図る一カ案から成る「命令状」
を発した。その第一条に「該処(富岡製糸場)ニ於テ製
造スル製糸悉皆ヲ其社(三井物産会社)仏国巴里支店ニ
於テ売却ノ取扱ヲナサシムルニ付誠実ニ之ヲ勤ムヘシ」
と明記された(三井文庫『三井物産事業史』本篇第二卷
二八八頁)。詳しくは前掲拙稿参照。
- (22) 国立国会図書館憲政資料室蔵「前田正名関係文書」二八
三。
- (23) 前掲『松方正義関係文書』第一卷 四四五頁～四四六頁
- (24) 川口久雄編著『幕末明治海外体験詩集』(大東文化大学
東洋研究所 昭五九)三八三頁。
- (25) 同右。
- (26) 久米邦武編『特命全權大使米欧回覧実記』第二卷(博聞
社 明一一)五一頁～五八頁。
- (27) この博物館見学は、谷が渡英時同行した文部省一等属手
島精一の勧めによるとも考えられる。手島は明治一〇年
一月教育博物館長輔に任命された経験がある。(竹林熊
彦「手島精一と教育博物館」『教育』第八卷第七号 昭
十五参照)。
- (28) 前掲『幕末明治海外体験詩集』三八六頁～三八八頁。
- (29) 同右 三九〇頁。
- (30) 石井研堂『明治事物起原』下巻(『明治文化全集』別巻
日本評論社 昭四六)七六九頁。

(資料)

『谷謹一郎巴里万博日記』

日記原本は谷謹一郎の令孫谷安氏(調布市在住)が現在所蔵されており、桃裕行元東京大学史料編纂所教授より本学安岡昭男教授へ複写提供され、岩壁が原文綴・註等を付して原稿化した。なお、本資料は昭和五十八年度大学院博士課程で講読に用いられたことを付記しておく。

凡 例

。原稿作成にあたり基本的に原文の特長を生かし、左に掲げた補足・削除・訂正等の記号を除くとはば原文となるようにした。

(補) は補足

(削) は削除

(訂・再訂) (A) (B) はAをBに訂正

(訂・再訂) (A) (B) は初めAをBに訂正し、再びBを訂正してAを生かしたことを示す。

また、長文の補足・削除・訂正部分内における補足・削除・訂正が混乱を引き起すことを防ぐため、長文全体部分を……↑

……で示した。

(例) (A) (B) (C) は、BとCとが補足文A内の削除と補足部分であることを示している。

原文中、片・片・フはそれぞれトキ・トモ・コトと改めたが、漢字は原則として正字を用いた。

外国の固有名詞は可能なかぎり原文綴を付した。

(一) 滞在日記(巴里ノ部)

三月三十日 朝雪、後雨。寒。土曜。

○昨廿九日ヨリ三日間、事務官以下休暇。事務局ハ府下「シャ
ンゼリゼー」大道中央ノ「西」(東)北「マチギヨン」街ニ在
リ。第十五號ノ家トス。此家ハ豪富某氏ノ所有ニ係ル。三層ノ
樓アリ。室ノ數大小二十、庖厨等亦皆屬ス。第一層ヲ事務局ト
ナシ、二層三層ノ各室ヲ分チテ副總裁以下ノ私室トス。室ニ應
シ各々毎月若干ノ税ヲ拂フ。僕三名、婢二名ヲ傭シ、庖厨ノ事
及ヒ各室朝夕之洒掃ニ使用ス。給料合セテ若干、副總裁以下ニ
分割シテ支給ス。各差等アリ。

寓居ノ博覽會場ヲ距ルコト西南凡二十町左右甚タ遠カラス。會
場ハ「シャンドマルス」ト云フ。「^{Champ de Mars}」^{聖奴河ノ東岸ニ在リ。}
河「ラ隔ツ」ノ西岸ヲ「トロカデロ」ト云「フ」(ヒ)、^{Trocadero}「兩所相
對」「シャンドマルス」ト相對ス。之ヲ合シテ博覽會場ヲナス。
又、寓所ノ東ニ「チュイルリー」宮在リ。第三世拿破崙帝、實
ニ之レニ居ル。其前面ヲ「コンコルド」ト稱ス。長サ三百九十
「ヤルド」、廣サ二百三十五「ヤルド」ノ大衢ナリ。「コンコ
ルド」ヲ北ニ(距ル)直「徑」(線)凡ソ十八町^{ニ凱戰}
門アリ。「チュイルリー」^{以下同じ}「^{宮ノ前}」^訂「^面」(門)ト遙カ
ニ相對「シ」(ス)。「其間ヲ」^削「シャンゼリゼー」ハ「コンコ
ルド」ヨリ起リ、凱戰鬥ニ至ル一線ノ大道ヲ云フ。道ノ廣サハ

〔四〕^訂（五）輻ノ馬車ヲ竝驅ス可^劑（ヘ）シ。左右ニ又大道アリ。人ノ歩行スル^訂（トコロ）（處）之レヲ人道トス。（〔□□〕^{劑補}）
 〔一〕幅凡ソ四、五間、馬車道ト相平行シテ凱戰鬥ニ達ス。^訂
 〔路少シク高〕（人道ハ少シク）〔馬道ヨリ高シ〕（高シ）。道^訂
 ノ兩側^劑〔共〕〔在〕ニハ〔皆〕^訂（盡ク）樹木ヲ栽ス。〔皆〕^劑楡
 樹、菩提樹^訂〔ナリ。樹ハ〕（ト交ル。他ノ雜樹無シ。皆）道ニ
 沿フテ直^劑〔□□〕行ニ栽ス。三行、或ハ四行ノ處アリ。其間皆人
 道トス。（^{劑補}〔遙遠間適、車行ヲ許サス〕。森綠清陰、樹下數千脚
 ノ椅子ヲ排置シ、客ヲシテ自由ニ休憩スルノ便ヲ取ラシム。凡
 ソ一歳ノ内極寒冬雪ノ時ニ非サルヨリハ、府下ノ人貴賤無ク貧
 富無ク、老幼男女閒遊散步、肩摩雜沓、車馬絡繹纖穢ルカ如シ。
 日曜安息ノ日ノ如キハ車馬ノ聲萬出地ニ轟キ、深更ニ至ツテ止
 マス。又、舞場・樂臺・^{劑補}（曲馬場）等アリ。凜燈星^{劑補}（ノ）如ク
 〔其〕明晝ヲ欺ク。處々ニ咖啡店アリ、割烹店アリ。綠陰下ニ
 椅子ヲ設ク。清潔、且ツ涼以テ酒スベク茶ス可シ。又、各所ニ
 艸花園アリ。各種ノ花ヲ栽ウ。（^{劑補}〔或ハ噴泉アリ。〕）〔又、
 工藝館アリ。其宏壯最モ驚□□。〕又、噴水器^劑（ヲ處々ニ設ケ
 ク可キモノハ工藝館ナリ。大道ノ南ニ在リ。〔□□〕^劑王宮・凱戰
 門^劑ト〔大道相鼎〕〔シヤンゼリゼー〕ニ相對立ス。凡ソ宮門ヨ
 リ凱戰鬥ニ至ルマテ、左右兩側、舞場・樂臺ノ在ル所、艸花園

Henry II

「チユイルリー」宮ハ一千五百六十四年「ヘンリー」二世ノ皇
后カセリン、ド、メジシイノ創建ニ出^ニツ^ニ（テ）、（其後、
建築ノ法ヲ變更シ、又）〔其後〕（降ツテ）ヘンリー四世及ヒ
Louis XV
「ルイ」十四世ノ時ニ至リ、〔之〕宮殿南北兩部ヲ増築セリ。
然レトモ千八百七十一年ノ内訌ニ及ヒ、暴徒之レヲ火ニス。
火、三日滅セスト云フ。此宮ハ〔歴代帝王ノ住セシ居殿タリ。〕
千八百八十年二月一日、第一（世）^補 奈勃翁帝（カ）^{Naoleon I 補} 此宮ヲ本
營トナセシ以來、歴代帝王ノ居殿トナル。「ルイ」十八世、チャ
Charles X Louis Philippe
ーレス十世、「ルイ、ヒリツプ」及ヒ第三世奈勃翁ノ諸帝實ニ
^補（皆）此宮ニ住シタリ。「宮」^削「固ヨリ」〔其ノ建築之法タル
^訂「固ヨリ」〕（甚タ）賞讃ス可キニ非サレトモ、其歴史上ニ關係
アルコト巴里府中他ニ此宮ノ如キ者アラスト云ヘリ。千七百九
十二年^訂〔七月以降〕（七月二十日以降八月十三日ニ至ルマテ）
^訂大〔改〕（革）命ノ亂〔アリシ〕此宮ニ起リ、千八百三十年七

山・成島・諏訪・三田・河原ノ數藩^①ト公使館ニ赴キ、公使ノ安著ヲ賀ス。歸途、凱戰鬥ヲ過キ一茶店ニ小憩ス。成島・三田ノ二氏ト茶店ニ別レ、他ハ皆共ニ動植^補(物)試驗園ニ遊フ。凱戰鬥ハ「シヤンゼリゼー」(大道)ノ(西)北端ニ在リ。^訂〔其地稍髙燥ニ位ス。而シテ〕(地位髙燥。大小ノ街陌四^削〔方〕通ヘ達、皆此門ニ集マル。門ノ高サ〔六十七ヒート〕〔百六十ヒート〕、幅^補(百)四十六ヒートアリ。故ニ巴里近傍ヨリ望ムニ見ヘサルノ處無シト云フ。此門ハ第一世奈翁帝カ戰勝勝利ノ記念トシテ千八百三十六年路易非利王ノ建築セシモノニ係ル。其費用ハ一千萬佛ナリト云フ。〔其〕前後左右ノ表面ニハ皆當時戰^訂〔將ノ諸像ヲ〕〔爭ノ狀ヲ〕彫刻ス。右ノ前面ニハ千八百七十〕〔七百九十〕六年國境ニ出軍ノ狀^補(ヲ寫シ、左ノ前面ニハ千八百十五年〔第一世奈翁カ〕澳國^訂〔ニ勝チ〕〔ヨリ〕凱旋ノ狀ヲ彫刻セリ。其他、前後皆〔彫刻ノ諸像〕〔戰場、或ハ諸將ノ彫刻〕アレトモ、一々記ルサス。此門ハ我カ芝増上寺^補(ノ山門)、淺艸淺艸寺ノ山門ノ如^訂〔キ〕〔ク〕〔常ニ〕諸人ノ登臨ヲ許ル^訂。〔門ニ登リテ眺望。登臨ノ景〕〔門頂^削〕ニ登ル。〕全府ヲ下瞰シ^削〔テ其景甚タ好シト〕、遠近ノ村落、又皆雙眸ニ鐘マル。其景甚タ好シ^削〔ト云フ〕。或ハ窮乏無賴ノ徒アリテ、白晝ト雖トモ足ヲ躍ラシテ地ニ投シ、以テ死ニ就クモノアリト聞ケリ。〔門ヲ^削□□門ノ周圍□〔四方ノ〕〔大小ノ〕街衢四方

異ナラスト云フ。外郭ニハ數處ニ^(補)門ヲ設ケ、^(削)「人ノ一」
 食品^(削)「ヨリ」^(訂)「府外ヨリ」^(削)「其他ノ府外ヨリ」入ル^(削)「ヲ」モノ
 ヲ檢シ、物ニ應シテ稅ヲ課ス。之レヲ入市稅ト唱フ。一年ノ收
 入^(訂)「凡ソ」^(削)「ハ」一億二千百萬佛ノ多キニ至ル。^(補)「凡ソ」巴里
 府歲入ノ半額ヲ占ム^(削)「千八百七十八年巴里府歲入ノ豫算ハ」
 二億五千四百八十三萬七千佛餘ナリ^(補)
 巴里府ノ地タル^(補)歐洲ノ四文明ノ中心ニシテ^(削)歐洲
 ノ中心ニ位シ、四通八達、四^(訂)「方皆」^(削)「面」山ヲ帶ヒ、殆ント
 我カ西京ノ地形^(訂)「ニ似」^(削)「テ」タリ。而シテ廣袤ハ^(補)「ト相似テ
 其廣袤ハ」甚タ之レニ過ク。^(補)「其一朝外患アルノ日ニ於テハ四
 境皆敵ヲ受ク。」故ニ不慮ノ備ヘ最モ平時ニ講セサル可カラス。
 今、我レ^(補)「巴里府ノ」周圍ノ城砦ト十六所ノ砲礮ト^(訂)「ヲ見」
 「^(ニ)就キ、佛人カ^(訂)「戒嚴ノ密ナル」^(削)「警備ノ嚴ナル」大ニ感
 スル所アリ。^(削)「方今、萬國交通據ツテ」熟々我東京ノ地形ヲ考
 フルニ、^(削)「決シテ帝王ノ」^(訂)「陸運海輸」^(削)「陸ノ運、海ノ輸」、敢
 テ不便トスルニ非ス。人家亦稠密廣袤數里ニ亘ル。萬國交通ノ
 時ニ方ツテ、政府ノ設ケアル東京ノ外、他^(訂)「亦適當ノ」^(削)「所」
 「^(處)無シ。然^(訂)「レトモ」^(削)「リト雖トモ」、今ヤ萬國ノ交通^(削)「^(愈密ニシテ愈)煩ナリ。既ニ密、且ツ煩ナリ。葛藤紛擾
 ノ憂ヒアル、必ス免カレサル所」^(削)「ナリ」^(削)「タリ」。^(削)「故ニ其警備
 「^(最)」^(訂)「人、或ハ云ハン」東京ノ「地形タル」^(削)「地タルヤ」固ヨ
 リ巴里ト其趣ヲ異ニス。固ヨリ其地形ヲ異ニセリ。其勢ヲ異ニ

セリ。論ヒ外患ノコトアルモ防禦甚タ難カラスト。是レ或ハ然
 サラン。^(削)「然リト雖トモ」^(補)

今、東京ノ地タルヤ堂々タル^(訂)「帝都ニシテ曾テ」^(削)「一郭ヲ以テ不
 慮ニ備」^(削)「大」^(削)「府」^(削)「都」ニシテ^(削)「百官ノ」帝王ノ都スル所、而
 シテ^(削)「曾テ」變ニ備フルノ堅砦無ク、敵ヲ禦クノ強礮無シ。
 其險トシテ頼ム所ノ者ハ、只下總ノ一海峽アルノミ。萬一外國
 ト釁ヲ開キ兵ヲ^(訂)「交ユル」^(削)「構ユル」ノ日ニ當リ、^(削)「砲」^(補)「丸」雨注、
 東京ニ亂射スルコトアラハ^(削)「必ス應ニ鳳駕ヲ」^(削)「車駕必ス當ニ其
 勢至危至難、或ハ車駕去ツテ安易ノ地ニ避ケ玉フヘシ。車駕一
 タヒ去ルコトアラハ、其以テ人心ニ感動ヲ生^(訂)「スルモノ如何
 ソヤ」^(削)「シ、勝算負」^(削)「豫シメ期ス可カラサルアラン」。
 故ニ苟モ東京ヲシテ長ク帝王ノ都タラシメハ、則チ宜シク強礮
 堅砦ヲ作り、以テ不虞ノ變ニ備フ可シ。此事タル^(訂)「決シテ容
 易ニ有ス」^(削)「言フニ易ク行フニ難シ」^(削)「到底行フニ難シトセ
 ハ、則チ朕然帝都ヲ^(補)「某地ニ」遷シ、東京ニハ單ニ政府ヲ置キ
 「^(貿)以テ貿易交^(訂)「易」^(削)「際ヲ行フノ」都府タルニ過キサラシ
 ムル。今、遷都ノ事聊カ鄙見アリト雖トモ、今爰ニ陳セス。
 畫景館ハ「ジャンゼリゼー」工藝館ノ西北ニ、三町ノ處ニ在
 リ。圓徑ノ巨館ナリ。館^(削)「中」ノ中央ニ圓臺^(削)「アリ」ノ階アリ
 テ^(補)「人ノ」上下スルヲ別ニス。^(補)「圓臺ノ直徑ハ四十四ヤルド、

圓臺周圍ノ壁ニ〔油繪〕巨大ノ油繪ヲ掲ク。〔其景眞ニ過〕光線

ノ反射ニ因リテ景色眞ニ逼ル。今、掲クル所ノ畫ハ、往年普佛

ノ亂ニ巴里府防禦ノ景ヲ寫ス。〔各所ノ砲敵〕敵兵ノ彈丸〔破

裂シテ〕砲敵内ニ著發シ即死〔モノ〕〔スル〕モノ負傷ノモノ。

即死ノ者ハ其屍ヲ負フテ外ニ移シ、負傷ノ者ハ猶目ヲ順シ敵ヲ

睨ス〔ルノ狀〕。砲〔丸ヲ〕ニ裝〔藥〕スル者、砲車ヲ運轉ス

ルモノ、彈丸ヲ齎ス者、家屋ノ火ニ罹ルモ〔者〕ノ。〔上官〕

將校士官ハ〔劍ヲ揮フテ〕奔走指揮〔ヲ怠ラス〕〔シテ怠ラス〕。

〔一〕兵士夫卒ハ飢ヲ忍ンテ〔立ナカラ餽ヲ食フ〕〔顧盼裝銃

シ〕、砲烟空ヲ蔽ヒ、日光晝暗ク、〔遠近〕村落ノ景、〔濃淡

ノ山、一眼〕山林ノ狀、遠淡近濃觀ル者ヲシテ戰狀ノ慘毒ヲ追

思シ〔戰〕テ自カラ戰慄タラシム。況ンヤ當時此慘苦ニ逢遇セ

シ巴里全府ノ士人ニ於テヲヤ。〔或ハ父兄ヲ失ヒ〕〔或其父兄

ヲ喪、親子兄弟良人知友ノ命ヲ擲チ□〕悲憤感慨報國之情、心

肝ニ溢レ骨髓ニ徹スルナルヘシ。

○四月一日 曇、晴。○月曜。○此日ヨリ皆本〔務〕課ノ事務

ヲ取ル。

○四月二日 晴、曇。微雨時ニ至ル。○火曜。

○四月三日 午前雨、午後晴、曇定マラス。○水曜。○午後平

山成信、河原徳立、三田信等ト博覽會場ニ赴ク。

〔谷澤一郎と巴里万国博覽會〕〔岩壁〕

(一) 滞在日記 (龍動ノ部)

龍動記

八月二日 朝曇、後晴。冷。○金曜日。○午前七時四十五分發

巴里府、十二時十五分著カ〔イ〕〔レイ〕港。自此港取瀛船、渡英

吉利海峽、達ドウブル港。午後四時右側也。自ドーブル、又就瀛

車。午後六時十五分龍動〔ビクトリア〕駐車場ニ著。松方總裁、石原

豐實、長崎省吾等在リ。〔四〕予ト併セテ四人、共ニ〔一〕雙馬

車ニ乘リ、〔Nothing Hill〕ノ寓居ヲ達ス。

昨〔夜〕〔朝〕松方總裁ヨリ電報ニテ余カ龍動ニ來ルヲ促カサ

ル。即チ本日出發ノ事ニ決〔ス〕〔シ〕、急遽行李ヲ裝ス。午

前七時、寓所ヲ出テ〔北方駐車場〕ニ至リ、七時四十五分ノ瀛

車ニ就ク。前田事務官長・三田信送ツテ駐車場ニ〔別ル〕〔來

ル〕。此日、文部省員手島精一君モ亦龍動〔ノ〕〔ニ〕赴ク。

駐車場ニ邂逅ス。〔即チ二人同室〕共ニ車ニ上リ、室ヲ同フ

ス。二人ノ外、他ニ乘客無シ。車中頗ル寛、二人共ニ横臥恣マ

マニ談話ス。殆ント家ニ在ルカ如シ。既ニ前田・三田二君ト別

〔ル〕〔レ〕瀛車亦發シ行ク。途中、Amiens等ノ駐車場ヲ

經、正午十二時〔午〕十五分〔カレイ〕港ニ達〔シ〕〔ス〕。

瀛車ヲ下リ駐車場ニ入り喫食ス。食後直ニ〔埠頭〕ニ至

リ、瀛船ニ移リ乗ル。〔此〕〔カレイ〕ヨリ對岸、英ノ〔ドー

パー」ニ至ル。之レヲ英吉利海峡ト云フ。相距ル甚タ遠カラス
 ト雖トモ、^劑海面「常ニ」(ノ)波濤常ニ穩カナラス。
^訂「行」(航)旅ノ^訂「人」(客)苦シム者多シ。今、我カ乗ル所
 ノ船ハ二隻ノ船ヲ合^訂「ハセ造リタル」(シ製造シタル)モノニ
 シテ、其頭尾ハ各相離レ、船腹機關ノ在ル所合シテ一トナル。
 以テ航行中動搖ノ甚シカラス、且ツ疾行スルノ便アリト云ヘ
 リ。午後一時前、解纜。此日「波濤」^劑船ノ動搖甚シク、客ノ嘔
 吐スルモノ亦多シ。船中上等ノ室ニハ唾壺ノ大ナルモノ「數」^劑
 十數箇ヲ置キ、豫シメ客ノ嘔吐スルモノニ備フ。海路ノ險惡ナ
 ル可知也。四時前、船「ドーバー」港ニ達ス。直ニ上陸ス。濱
^劑車「將サニ發」用意シテ乗客ノ上陸ヲ待ツ。濱車ニハ、チャー
^劑リングクロス、ビクトリア^{Victoria st. Crass.}ノ兩駐車場ニ至ルノ別アリテ、
^劑「客」客毎ニ其至ル所ノ駐車場ヲ問ヒ^劑「前後列車ヲ區別シ
 テ乗ラシム。此兩駐車場ハ共ニ龍動府中ニ在リ。余ハ「ビクト
 リヤ」(ア)駐車場ノ車ニ就キ、手島君ハ他ノ車ニ就ク。
 共ニ相別ル。此車中ニハ同乗ノ客甚タ多ク、復タ横臥ス^劑「
 ル等ノ快ヲ取ル能ハ」^訂「ス」(サリシ)。「ドーバー」駐車場ニテ
 暫ラク車ヲ止メ、荷物ノ検査アリ。煙艸・茶ノ検査極メテ密ナ
 リ。余カ攜フル所ノモノハ手荷物ナレハ別ニ検査ヲ要セス。
^劑「車中ニテ」故ニ車ヲ下ラス。半時間發車。午後六時十五分
 「ビクトリア」駐車場ニ達ス。松方總裁・石原豐實・長崎省吾

君等在リ。余ト合ハセテ四人共ニ同車シ、車中巴車府^劑「中」博
 覽會ノ狀況、及ヒ前田事務官長カ^劑「傳」囑託セシ事情等ヲ總裁
 ニ傳申ス。暫ラクシテ「ノッチングヒル」之寓次ニ投ス。夜、
 總裁ハ石原豐實ト上野公使ノ招飲ニ赴ク。夜雨。
 八月三日 朝雷雨、午後止。土曜日。午後四時ソースケン
 シンクトン博物館ニ至ル。夜、南領事ノ招飲ニ赴ク。巴里前
 田事務官長^訂「ノ」(ヨリ)電信來ル。
 午前、石原氏ト同行。三井養之助ヲ訪ヒ、又、公使館ニ至リ上
 野公使・鈴木書記官等ニ面シ、歸途遂ニ長崎省吾君ノ旅寓ニ至
 リ、少時談話シテ去ル。午後四時、總裁ニ陪シ石原・長崎二氏
 ト共ニ「ソースケンシンクトン」博物館ニ至ル。此館ハ最モ歐
 洲ニ名アリテ古器物其他類集ノ品物頗ル多ク、館中物品ノ排置
 甚タ整理セリ。^訂「巴里府中未タ此館ノ如キ」^劑「整」壯宏整理セシ
 モノアルヲ見ス。此館ハ千八百五十一年大博覽會ノ時收入シタ
 ル益金ヲ以テ基礎ヲ起セシニ係ル^訂「抑モ此館」^訂「ハ」(ノ)濫觸ハ
 千八百三十八年ニ^訂「在リ」(シテ)、今ハ距ルコト四十二年^劑
^劑「年」ニ在リ。然レトモ當時固ヨリ觀ル可キコト無シ。千八
 百五十一年、龍敦ニ於テ萬國大博覽會ノ時ニ方リテ、英國製品
 ト外國製品ト其形狀ノ巧拙等ヲ比較シ、瓶メテ英品ノ外品ニ及
 ハサルヲ知り、大ニ英人ノ感憤スル所トナリ、遂ニ此館ヲ設ク
 ルニ至リ、其壯宏整理セルコト巴里府中未タ此ノ館ノ如キヲ見
 サルナリ。此館、建築ノ費用ハ^劑「千八百五十」議事院より其半

額ヲ補助シ、千八百五十一年博覽會費ノ割餘ヲ以テ、其半額ヲ補ヘリ。其趣意ハ技藝學術ヲ進歩セシムルニ在リテ、〔適〕該〔當〕ノ良教師ヲ置キ、技術學校ヲ設ケ、公ケノ試験ヲ爲シ以テ褒賞ヲ領與シ、或ハ美術ノ品アレハ之レヲ買上ケ、又ハ之レヲ展覽ニ供シ、或ハ〔美術〕技藝文庫ヲ〔設クル〕〔立ツル〕等ノ方法ヲ設ケ、一ニ進歩ヲ謀ラサルコト無シ。其費ス所、一ケ年凡ソ三十萬磅トス。此費用ハ皆國庫ヨリ支給ス。〔館中〕現今館中ニ〔附屬〕保管スルモノ四ツアリ。第一ヲ技術校トス。製圖・油畫等之科ヲ教ユ。第二ヲ技術文庫トス。貳萬五千卷ノ書ヲ貯ヘ、又、製圖・彫刻・寫眞等ノ採集品ヲ備フ。第三Up-to-date Artヲアップライダートト〔〕ス。中古及ヒ近世ノ技工品二萬個ト今古有名ノ再製品等ヲ集ム。第四ヲ〔彩〕圖畫室トス。概スルニ本館〔〕結構ノ壯麗ナルト其貴重スベキ價直ト共ニ全世界中最美ノ一ト稱ス可シ。〔館中〕惣地面ノ廣サハ凡ソ一萬四千五百坪、其價ハ三十萬圓餘ナリ。我輩〔周ネク〕館内ノ上下各室ヲ〔環覽〕〔順〕〔巡覽〕シ、凡ソ二少時ヲ費ヤス。東洋ノ〔物〕〔器物〕〔古今ノ別無ク〕〔モ亦能ク〕採集〔甚〕タ至レリ〔シテ〕甚タ至レリ。其品物ニ應シテ年代ノ區分ヲ立テ以テ古今ノ沿革ヲ知ルニ便ナラシム。午後六時、場ヲ出ツ。Hyde Park (公園) ノ側ヲ過ク。〔故親王〕Prince Albert (ヘイデルパーク名公) ノ側ヲ過ク。〔故親王〕アルベルト殿下ノ記念碑ヲ見ル。殿下ハ今ノ英國女帝陛下ノ婿親王ニシテ千

〔谷 謹一郎と巴里万国博覽會〕 (岩壁)

八百六十一年ニ薨セラリ。〔薨後〕此記念碑〔ヲ建ツ〕 (ハ) 〔其費用ハ〕十二萬磅ノ費用ヲ以テ英國國民ノ建ツル者ニ係ル。高サ百七十五フヒート、中央ニ殿下ノ巨像〔ヲ〕アリ。高サ十五フヒート、青銅ニ鍍金シタルモノ光彩目ヲ奪フ。石ハ多ク大理石ヲ用ユ。四方ニ〔古代〕百六十九ノ人物ヲ彫刻シ、古代ノ彫刻術ヲ〔見〕 (示) ス。壯麗美觀、觀ル者ヲシテ自カラ故親王殿下ノ遺徳ヲ想像セシム。歸寓後七時ニ至リ、南領事ノ招キニ應シテ至ル。日本調理ヲ食フ。食事中長崎省吾氏來リ、前田氏ヨリ電報ヲ得。其報ニ清輝艦長井上中佐一週開巴里ニ滞留、烘開烟花ヲ備ス。總裁ノ歸巴〔ヲ何フ〕 (如何) 云々ノ意ナリ。於是、總裁ハ明〔後〕五日歸巴ノ事ニ決ス。食後談話。一少時歸寓。夜、又雷鳴アリ。

八月四日 曇、雨。○日曜。○午後、總裁ハ「ドクトル、ドレツセル」氏、及ヒ「コロネルクープ氏ヲ訪フ。〔余ト〕石原・長崎及ヒ余ト皆隨行ス。」「ドクトル、ドレツセル氏ハ曾テ我國ニ來游シ、内地ヲモ巡回シ、粗事情ニ通シタル人ナリ。性、甚我國ノ技術ヲ好ム。彫刻ノ體裁、〔畫〕彩畫〔〕ノ模様等尤モ意ヲ注セリ。我國滞留中〔多ク〕〔古器物ヲ〕購求シタル〔モ多ク〕古器物多ク、〔全室〕 (每室) ニ裝飾シテ觀テ自カラ樂ミ、且ツ〔來客〕以テ來客ニ誇ル。居宅ハ高燥之地ヲ占メ、稍壯觀ヲナス。〔樓家〕 (民延テ) 層樓ニ登〔レハ〕 (ル)。

政治史学 第三十七号

七二

龍動府中ノ大半ヲ下瞰シテ眺望極メテ潤ナリ。樓ニハ我國ノ花鳥艸木等模様物ノ雛形ヲ集メ、氏カ講究ノ畫室トス。總裁戯レニ氏ニ言フテ曰ク、此層樓ニ登リテ絶勝ノ景ヲ眺望シ、絶美ノ模本ニ對シ絶倫ノ才能ヲ以テ技術ヲ講究セハ、他日我國ノ技量モ亦美ヲ龍動府中ニ擅ニスルヲ得サル可シ。嗚呼、此樓ヤ。是レ我國技術ノ仇敵ト謂フ可キナリト。氏モ亦之レヲ聞キ大ニ絶倒ス。茶菓ノ供アリ。少時間談話シテ辭シ去ル。更ニ路ヲ扨ケ「River Thames」河ヲ渡リ、コロネル、クープ氏ノ家ヲ訪フ。氏ハ現今非職ニシテ常ニ家ニ在リ。齡、凡ソ六十左右。「甚タ」頗ル健ナリ。「婦人」妻「氏アリ」(氏モ)亦復同齡、「夫妻皆」共ニ大ニ日本癖アリテ談話中常ニ耳ヲ傾ケテ我國ノ事情ヲ聞ク。「偶清輝艦來著シテ」數日前、清輝艦來著ノ時ハ「主トシテ」首トシテ見物ニ赴キ、艦長ノ厚意ヲ以テ周ク艦内ヲ縱覽シ、「一個ノ外」艦中一箇ノ外國人ヲ使用セサルヲ觀テ大ニ日本ノ進歩「ヲ」(ニ)感歎セリト「啗」口ヲ極メテ賞譽セリ。此家ハ極メテ古築ニ「保ル」(シテ)古城郭ノ體アリ。家ニハ又古器物ヲ貯フ。就中、支那製品最モ多シ。是レハ往年北京「攻入」ヘ進入セシトキ分捕セシモノニ係ル。金・銀・珠寶「〇〇」、支那皇帝「カ」宮殿中玩「〇〇」弄ノ御物「〇〇」ナリシ「モノ」ト思ハル、モノ多シ。庭中ニハ盛ソニ百種ノ艸木ヲ栽植シ、「〇〇」四時花ヲ斷タス。凡ソ一週間ニ一回客ヲ延「ヒテ」(キ)、小筵ヲ開キ、飲「〇〇」食閒話、「夫婦共ニ」

(以テ)餘年ヲ樂「ミトス」(ムト云フ)。地ハ「テームス」河ニ臨「ミ」(ム)。「廣褒大ノ」面積「甚」大ナラスト雖トモ、園中「四ケ」屈曲路ヲ通シ、「亦」逍遙ニ適「シ」、或ハ河流ニ舟ヲ浮ヘ釣魚ノ樂ヲモ爲ス可シ。且ツ市中ノ雜沓ヲ避ケ、清幽閒話、亦一小樂地ナリ。暫ラクシテ辭シ去ル。又、路ヲ轉シテ「キユウパーク」ノ公園ニ至ル。巨大ノ温室アリ。逍遙數刻、黄昏、寓ニ歸ル。夜長崎ヲ招キ會食ス。

※欄外書込み

Boulogne

此日、シーボルト「氏巴里府ニ歸ル途、「ブ」ロオン」停車場ニ於テ相待ツノ約ヲナシテ別ル。

八月五日 晴。月曜日。午前、鈴木書記官來リ別ヲ總裁ニ告ケ、十時「寓ヲ出テ「チャーリングクロス」停車場ニ至ル」公使館ヨリ馬車一輛ヲ「〇〇」贈リ來ル。總裁以下同乗シ、「チャーリングクロス」停車場ニ至ル。「長崎外數名送り至ル」送ル者ハ長崎外數名ナリ。十時四十分發車ス。午後一時「フォークストン」(トン)停車場ニ著ス。英海峽ノ北岸ニ在リ。此「〇〇」處ニテ瀛車ヲ下リ瀛船ニ就ク。船ヲ「タイドトレイン」ト云フ。他船ニ比スレハ早シ。船岸ヲ發ス。海波頗ル平穩、午食ヲ船中ニ取ル。皆、牛・豚肉ノ冷物ナリ。午後三時左右「ブーローン」港ニ著ス。之レヨリ佛國ノ領トナル。停車場ニ入ル。「シーボルト」氏迎ヘ待ツ。即チ共ニ同車ス。午後八時二十分巴里府ニ著。前田・加藤・平山・兼松・坪内等來迎フ。八時三十五分寓所ニ歸ル。

(三) 滞在日記 (白耳義・和蘭ノ部)

八月十一日 晴、曇。日曜。早起、家書ヲ認メ平山氏ニ委嘱ス。^劑午後七時、初メ總裁ノ龍動ニ在ルヤ「ドレツセル」氏ヲ東道トナシ蘇格蘭ニ赴カントスルノ約アリシモ、巴里府ヨリ電報ノ故ヲ以テ事遂ニ果タサス。速ニ歸巴シ、去五日ヲ以テ歸巴シ、直ニ煙花技ノ

午後七時總裁ニ隨行、^{Paris}白耳義ニ赴ク。「シーボルト」氏モ隨行ス。三人皆^劑「車」輕裝シ、^劑「事務局」寓所ヲ出テ「ガールジュノルド」ニ至ル。送ル者ハ前田・加藤・遠竹・兼松・遠野・坪内・伊達・村松等之諸氏ナリ。八時十五分發車ス。^訂「暫ラクシテ」(既ニ)夜ニ入ル。車中、他客無シ。三人一車ヲ專ハラシ、頗ル寛濶ヲ覺フ。^劑「初メテ駐車場ニテ瀛車ニ入ル券ヲ買フ時、別ニ若干ノ金ヲ驛□□□與ヘ」夜半頃アミアン駐車場ニ達ス。十數分時間停車ス。乃ツチ下ツテ駐車場ニ入り、少シク飲食ス。

八月十二日 曇、午後雨。月曜。黎明睡起、車窓ヲ推シテ望ム。四方皆曠野ニシテ多ク牛馬ヲ牧養ス。耕地甚タ稀ナリ。午前四時「モンス」駐車場ニ著。^補(實ニ)佛白兩國ノ境界ナリ。暫ラク車ヲ下リ駐車場ニ入ル。例此處ニテ旅客ノ荷物ヲ検査ス。然レトモ余輩ノ荷物ハ皆「ブロッセル」^{Brussels}白耳義^{白耳義}ニテ検査スト聞キ、小憩喫茶シテ又車ニ上ル。第五時四十分前後「ブロッセル」ニ著ス。「シーボルト」氏直ニ驛長ニ面シ、總裁以下荷物検査ノ事ニ就キ謀ル所アリ。遂ニ又檢セス。大抵、外國ノ貴紳^劑(ハ)ナレハ其身

「谷謹一郎と巴里万国博覧会」(岩壁)

分^劑「ニ」ヲ記シタル名刺ヲ以テ驛長ニ示ス時ハ、必シモ検査ヲナサス。況ンヤ白耳國ノ如キ關稅ノ寛ナルニ於テヤ。^(テヤ?)駐車場ノ前ニ

於テ直ニ馬車ヲ買ヒ、王宮前ノ旅舎ニ投ス。「ホテル、ド、ベルビユウ」ト云フ。府下^劑「第」優等ノ客舎ナリ。各一室ヲ占ム。茶菓ヲ喫シ、皆暫ラク眠ニ就ク。昨夜車中ニテ安眠ヲ得サレハナリ。十時後^劑「束裝」總裁^劑「以下」ト市中ニ散歩ス。「十二時」街衢ノ道路太タ廣カラスト雖トモ、亦能ク整頓セリ。^劑「衢街」道路ノ狹隘ナルハ、人ノ往來ニ、或ハ雜沓ノ極メ不都合ナルカ如シト雖トモ、商賣上ニ取リテハ甚タ便利ナルモノナリ。巴里府中ノ如キハ道路頗ル廣キニ^劑「□」過キ、來往ノ人ハ皆^劑「散歩」自カラ散步ノ氣象ヲ帶ヒ、物品ノ購求等ニハ自カラ不^劑「自由ナル」便ナルノ勢アリ。我銀座通改正ノ道路美ハ則チ美ナレトモ、稍巴里府中^劑「景況」觀ヲ同フシ、隨ツテ商賈輩^補(ノ)不便ヲ唱フルモノ妙ナカラスト聞ケリ。ブロッセル」府中ノ道路モ「車馬」人ト車馬トハ其通路ヲ殊ニシ、中央ヲ車馬ノ道トシ、兩側ヲ人道トス。人道ハ中央ヨリ高キコト凡ソ二、三寸アリ。皆疊ムニ石ヲ以テス。^劑「之レヲ概スルニ」中央・兩側トモ惣シテ我カ四間乃至五間ノ廣サニ過キス。^劑「乗合馬車アリ、縱横ニ往來ス。路ニ鐵條」中央路ニ鐵條アリ。乗合馬車其上ヲ往來ス。又、犬車アリ^補(テ)蔬菜等ノ食用品ヲ運搬ス。馬車ノ體裁ハ甚タ良シ。^劑「此府ハ高燥ノ」土地ハ小丘ニシテ高燥ナリ。府ノ周圍ハ環ラヌニ大道ヲ以テス。之

レヲ「Boule Yard」ト稱ス。府ニ上下ノ別アリ。猶大坂^訂「東京ノ」(ニテ)上町・下町アルカ如ク、東京ニテ山ノ手・下町ノ稱アルカ如シ。上部ノ區ニハ絹紳・貴族・富豪ノ人多ク住ス。下部ニハ中等以下多シトス。府下、寺院^削「頗尔多シ」^削「□」各所ニ在リテ皆多クハ舊教ヲ奉ス。「此府」(白國)中最モ有名ナルハ

Lanc

「レース」ノ製造ト小銃・短銃ノ製作トナリ。其他諸製造物、亦

甚タ盛ナリ。産物ニハ鐵・石炭等最モ多シ。鐵ノ產出大ナル^訂「ハカ爲メ」(ニ因リ)、近時英國ニテ外國ノ爲メ鐵道線ノ製鐵大ニ減少セシト云フ。市中ノ物價ハ頗ル廉ナリ。巴里府ニ比スレハ二割

乃至三割^訂「ハ」(ノ)相違アリ。隨ツテ人情自カラ純朴ノ風ヲ存セリ。

補

(△印にて欄外に記す)

(市中、往々我カ扇子・團扇等ノ雜小品ヲ販賣スルヲ見ル。)

午時過キ某ノ割烹店ニ就キ干殘ヲ取ル。殘後、歸寓ス。總裁ノ爲メ書ヲ作り、鯨島公使ニ寄ス。公使ハ現今暑ヲ避ケテ、

「曼」日耳曼國某溫泉場ニ在リ。又、電^訂「報」(信)ヲ巴里府ニ

送り安著ノ事ヲ報ス。晚殘前ニ王宮ノ正面公園地内ニ逍遙ス。殘後再び市中ニ散歩ス。

八月十三日 曇。火曜日。午前、總裁ハ「シーボルト」ヲ隨

ヘ外務大輔バロン・ド・ランベルモン氏ヲ訪ヒ、小時間談話ヲナシ、午後同氏ノ案内ヲ受ケ議院ニ赴キ、暫時議事ヲ傍聽ス。偶、我國ヘ在駐ノ公使タリシ某氏ニ面會アリ。既ニシテ議院ヲ去リ、國立銀行ニ至リ、又「レース製造等」^削「ニ至ル」ヲ一覽ス。此

日、外務大輔ノ斡旋ニ依リ「アンベルス」^削「有名ノ城郭縱覽」ノ爲

メ陸軍省ヨリノ添書ヲ得タリ。且ツ製銃・製鐵等各場縱覽ノ爲メ、外務^削「省」・陸軍兩省ヨリ各場長ヘノ添書ヲモ併セ得タ^訂「レハ」(リ)。巴里前田氏ヨリ書狀來ル。東京ヨリノ來信ヲ封入セリ。之レカ答書ヲ認メ、併セテ家書ヲ作り巴里ニ郵送ス。夜、市中ヲ散歩ス。本日(午後)^補、總裁ト馬車ニテ市中周圍ノ大道ヲ巡廻セリ。

八月十四日 晴、大風。水曜日。午^訂「後」(時)、總裁ニ陪

シ國立銀行ニ至ル。首長不在ノ故ヲ以テ直ニ歸寓シ、午殘ニ就ク。偶々一商客マン氏來リ^補「テ」總裁ヲ訪フ。「此人」(氏)ハ

前田氏ト能ク相識ル。曾テ總裁ト巴里府ニ相遇フ。殘後面會^削「セリ」。

談、日本米輸出ノ事ニ及フ。「此人」(氏)ハ常ニ日本貿易ノ事ニ注意シ、直接通商ノ說ヲ立ツ。現ニ「アンベルス」府ニ

住居ス。此日一小時閒談話シテ去ル。去ルニ臨ミ總裁ニ告ケテ曰ク、是レヨリ「アンベルス」ニ歸リ、明日閣下ノ來著ヲ駐車場ニ

迎フ可シト。午後二時半、^削「再ヒ」總裁ト再び國立銀行ヲ訪フ。

支配人某・某兩名相迎ヘ、^補「先ツ」延テ客室ニ入り、夫レヨリ銀行ノ諸部ヲ案内シ、金庫・帳簿課・紙幣製造^削「□」室等ノ各所ヲ

縱覽セシメ一々説明アリ。銀行ノ建築極メテ美大ナリ。小丘ノ半腹ニ在リ。金庫ハ自カラ土中ニ築キ堅牢ナリ。其壯大ナルハ佛ノ

Banque de France ^削「Bank of England」^削「Bank of England」

「バンク・ド・フランス、英ノ」^削「Bank of England」

「バンク・ド・フランス、英ノ」^削「Bank of England」

「バンク・ド・フランス、英ノ」^削「Bank of England」

「バンク・ド・フランス、英ノ」^削「Bank of England」

「バンク・ド・フランス、英ノ」^削「Bank of England」

十年ニ在リ。其以前ハ白耳義國中數個ノ銀行アリシモ、當時、外務卿某ノ發意ヲ以テ數銀行ヲ合併シ、新タニ一大銀行トナシタリ。而シテ外國ニ支店ヲ置カス、但各地豪富之者、或ハ銀行ノ間ニ於テコレレスボンデンス」ノ訂約ヲ結ヘリ。故ニ費用極メテ少ナリト云フ。午後四時、辭シ去ル。此日、銀行首長ハ旅行中ノ山ニテ不在ナリ。夜、鯨島公使・前田事務官長等ハ送書ス。

Correspondence

八月十五日 晴。午前九時十五分「プロッセル」府ヲ發シ、十時三十分「アンヘル」府ニ著ス。府商マン氏、馬車壹輛ヲ具シ來迎スルコト約ノ如シ。乃チ四人同乗シテ直ニ有名ノ城郭ニ入り、「コネル」某ニ遇ヒ、陸軍卿ノ添書ヲ示シ以テ城郭縱覽ノ事ヲ求ム。偶、本日ハ府中ノ祭日ニ當リ休暇ニ屬セリ。然レトモ來訪ヲ空フ(ス)ルモ固ヨリ本意ニ有ストテ、殊ニ士官一人ヲシテ嚮導セシム。先ツ進ンテ郭門ニ入ル。砦塙ハ皆疊ムニ磚石ヲ以テ(セリ。但前)三重ニ建築セリ。但、前面ノ一重ハ築クニ砂土ヲ以テス。其背後ノモノモ上部ニハ皆(覆)沙土ヲ以テ之レヲ覆フ。砦外ハ(環)ラスニ(溝)墟ヲ環ラス。火藥庫・銃砲庫・電信庫・兵士詰所等、新(ニ)築造ノ者アリ。現今、貯フル所ノ火藥ハ凡ソ百萬「キログラム」、平時ニハ常ニ三月ノ糧食ヲ貯フ。砲臺ニ上リ(四方ヲ眺望ス)(テ)、平野十數里ニ互リ能ク敵軍ヲ四方ニ制スルニ足ル。砲塙一帶、府ノ三面ヲ環ル。一面ハ河水ヲ帶(フ)(ヒ)自然(ノ)防敵ノ要トナル。且ツ、(此)河畔近傍ノ地ハ多ク卑濕ナリ。故ニ戰時ニハ河水ヲ決シ、城郭ノ溝墟及ヒ郭外ノ

〔谷 謙一郎と巴里万国博覧會〕(岩 壁)

郊原ニ漚流シ、敵ノ進入ヲ妨ク。又、府ヲ離レテ五稜ノ砲郭八所ニ散布ス。全体ニ就キ談スルトキハ、砲郭ノ位地・體裁等巴里府ニ彷彿タリ。(實ニ)稱シテ天下無雙ノ名城ト云フ(モ)、敢テ誣言ニアラサルヲ知ルナリ。八所ノ五稜郭、廣狹・體裁共ニ甚シキ異同無シ。其一所ニ就キ縱覽セシニ、築造(シ)ノ堅牢、經營ノ巧美、實ニ驚歎セリ。周圍ノ方面(ノ)ニハ溝墟ヲ鑿チ(經)ツ。凡ソ、幅ハ凡ソ三、四十間、深(計)〔口大〕(サハ)太餘ニ及フ。

(一圍)砲臺周圍ノ長サハ凡ソ十數町ニ互ル。中央ニ別ニ高塙ヲ築ク。其狀、松茸ノ如シ。大砲數門ヲ備フ。是レハ外郭ノ敵手ニ陷リタル時ノ防禦ニ備フルナリ。砲臺中ノ空地ニハ多ク菜園ヲ設ケ、以テ兵卒ノ食用ニ供ス。士官ノ住宅アリ。檻獄アリ。彈藥ノ倉庫等完全至ラサル所ナシ。又、陸軍ニ屬スル鐵道隊アリテ常ニ汽車運轉ノ事ヲ操練ス。既ニ縱覽シ了リ、士官ニ伴ハレ一室ニ入ル。兵士カ飲用ノ燒酎ト麥酒トヲ飲マシム。性、甚タ烈多ク飲ム可カラス。暫ラクシ郭ヲ出ツ。郭外ニ土坑兵カ(探)練ノ爲メ築キタル臺場(實地演習ノ場所ヲ一覽)〔口〕ス。四(訂)面(方ニ)捲立テ臺場ヲ築キタルモノアリ。其大ナルモノハ高サ太餘ニ及ヒ、小ナルモノハ僅カニ匍伏身ヲ隱スニ足ラ(ス)。或ハ又、小墟ヲ穿チ、(横)縱横ニ柵ヲ作り、柵ニ鐵線ヲ經ヒ騎兵ノ侵襲ヲ妨クニ(充)備フ等、甚タ習熟シテ其法亦甚タ密ナルヲ覺フ。

午後二時前、各砲臺ノ縱覽全ク了ル。東道ノ士官某ト別レ(午後)某店ニ午餐ス。餐後、相場所ニ至ル。相場所ノ建築ハ古代ゴ

シツク」ノ法ヲ用ユ。往年、祝融ニ罹リ、今又、古法ニ據リ建築故ノ如シ。中央ニ數畝ノ庭ヲ設ケ、「前後及ヒ」人ノ往來通過スルヲ許ルス。四方ノ廻廊ヲ區分シテ諸品ノ相場局ヲ設ク。「設ケハ」國債證券・銀行株券・羅紗・薪・引請會社株券・砂糖・爲替相場・米穀類・石油・木綿・菜油・諸飲料等ノ類、各其部類ヲ定ム。廊上ハ商法會議所ニテ、又分ツテ數局トス。

River Maas 河畔ニ一大港アリ。「常ニ」三千乃至四千ノ外國商船「ト」(常ニ)滯泊ス。此港ノ盛ナルハ宇内ノ第三等ニ位ス。「是ニヨリ先キ」(初メ)「アンベルス」ノ和蘭ニ屬セシヤ第一等ノ港ナリシモ、獨立以來頗ニ衰頽ニ傾キタルハ、和蘭ニ於テ「Amsterdam」ノ「開」港ヲ開キタルノ影響ニ出テシナリ。爾來、白耳義ニテ盛ニ鐵道ヲ築キ、府稅ヲ薄フシ勉メテ運輸ノ便ヲ開キ、「再ヒ」今ニ至リテハ其繁盛殆ント故ニ復セリト云フ。

又、動物園ニ至ル。獅子・虎・豹等ノ猛獸、其他奇禽怪獸頗ル多シ。「殊ニ觀テ驚最モ見ル可キモノ」□鐵柵」(又)、一巨室アリ。前面ニ鐵柵ヲ設ケ、「其」他ハ磚石ヲ以テ築「セ」(ク)。内ニ巨蛇十數尾「ヲ放チ」(及ヒ兎・鳩各)數十「ノ鳩及ヒ兎ト又其内ニ」(羽ヲ)放棄「シ」(セルモノアリ)。「蛇ノ飢ヘテ食ヲ求ムルヤ直ニ鳩或ハ兎トヲ捕ヘ」(テ)(自カラ)食。蛇ノ大サ「皆」凡ソ丈餘ナリ。鳩ト兎トハ皆蛇ノ飢食トナス。蛇ノ飢ヘテ食ヲ求ムルヤ「自カラ」直ニ自カラ捕テ食フ。又、「公園」某ノ公園ヲ過ク。陸軍ノ奏樂アリ。遊客、稍多シ。黄昏マン氏ト再ヒ某店ニ

晩餐ヲ取り、餐後別ヲ告ケ、夜十時十五分汽車「アンベルスヲ發シ、」(夜半)二時「リイス」ニ著「ス」(シ)「ホテル・ド・スウィス」ニ投宿ス。

八月十六日 「前雨後晴」(忽雨忽晴)。「午前六時」曉起盜寐ニ遑アラス。駐車場ニ至リ八時前ノ發車ニ就キ、八時廿五分「セアン」村ニ著ス。此地ニハ有名ノ製鐵場アリ。先キニ「プロッセル」ニ於テ外務卿ノ書面ヲ受ケ、豫シメ其事ヲ該場ニ電報「セリ。仍テ」(シ)置キタレハ、「セアン」駐車場ニ著セシト

キハ、機械方サドアン氏「ナル迎」馬車ヲ具シテ來迎セリ。乃チ「總裁」同乗シテ製鐵場ニ至ル。現時、頭取「不在」旅行中、不在ナリ。「サドアン、クラフ」ノ兩氏導ヒテ機械場ニ入ル。此製造所ノ廣サ方一里ニ互ル。「鐵」縱横ニ鐵路ヲ築キ以テ運搬ノ便ヲ謀ル。「此地ハ石炭ト鐵トヲ生ス」。

鐵ト石炭ト皆共ニ製造場中ヨリ生ス。故ニ其便ヤ大ナリ。石炭坑ハ其深サ五百三十メートル「アリ」(ノ)地下ニ在リ。日ニ若干ノ人夫ヲ役シ「人ノ上下」採掘ニ從ハシム。「氣」蒸氣器械ヲ二ヶ所ヲ据ヘ、以テ人ノ上下ト採掘セシ石炭ト「ヲ」引揚ク。且ツ此地ハ「ムース」ノ河畔ニ在リテ、「最モ」又、水運ニ便ナリ。此河ハ「アルベルス」ヲ經テ和蘭ヲ過キ流レテ海ニ入ル。製造場中、諸機關ノ精良巧實ニ人目ヲ驚カセリ。精鐵所ニテ鐵ヲ精鍊スルノ法最モ肝要ナレトモ、専門ノ人ニ非サレハ其一班ヲモ窺ヒ

知ル能ハス。某大概ヲ聞ク〔^削□〕ニ、各國產出ノ鐵二、三種ヲ備へ、各其量ヲ定メテ〔^削混和〕銻解混和セシ〔^削メ〕ムルモノト云ヘリ。又、伸鐵所ニテハ〔^補專ハラ〕鐵道用ノ線鐵ヲ〔^削大小〕製造セリ。其大要ハ「^削」字形ノ模形各大小二、三種アリテ、最初ニ鐵塊ノ長サ凡ソ六尺、圓徑凡ソ二、三尺ナルモノヲ眞赤ニ燒キ、之レヲ第一ノ模形ニ充テ、〔^削前ヨリ〕機械ノ運轉ニ依リ一時ニ之レヲ引キ延ハシ、夫レヨリ第二第三ノ模形ニ移シ、遂ニ〔^削線鐵ノ〕長サ凡ソ十間程ノ線鐵ヲ製シ得ルナリ。現今、西班牙及ヒ濠洲諸國ノ注文ヲ引受ケ專ハラ線鐵ノ製造ニ著手セリ。全體此製鐵所ハ世界中最も有名ノ一ニシテ、〔^削地形ノ便甚タ好ク〕運轉ノ便ハ水陸ヲ兼有〔^削ス〕〔^削シ〕、且ツ鐵モ石炭モ皆場内ニ產出スルカ故ニ製造品ノ代價自カラ廉價ニ當ルトノ由、故ニ濠洲ノ如キ固ヨリ〔^補其〕本國タル英國ニ注文ナスヘキモ皆此製鐵所ニ依頼スルナリ。現今歐洲中鐵路ニハ皆鋼鐵ノ線路ヲ用ユルノ說ニ歸シタリ。其費用ハ幾分カ高貴ニ當レトモ、其維持ノ長短ニ於テ甚タ得益トナル由ナリ。

午時、午喰ノ供ヲ受〔^訂ケ〕〔^削ク〕。食後、再ヒ場中ニ至リ各部ヲ巡覽ス。午後五時〔^削漸ク了〕了ハリタレトモ、未タ十分ニ盡ス能ハス。乃ハチ「サドアン、クラフ」ノ兩氏ト相別レ「ムース」河畔ニ至リ、川漁船ニ乘リ流ニ隨ツテ下ル。六時過「リエス」ニ著〔^訂ス〕〔^削シ〕、直チニ歸寓ス。

「谷謙一郎と巴里万国博覧会」(岩壁)

八月十七日 晴。午前十時前、小銃製造所ニ至ル。「コロネル」某導ヒテ場中ニ入り各部ヲ巡覽ス。小銃ノ製造高ハ一日凡ソ一百挺ナリト云フ。又亦盛大ヲ極メタリ。〔^削場中ニテ小銃並拳銃ノ試打場アリ。此處ニテ〕十二時前辭シ去〔^訂ル〕〔^削リ〕、旅寓ニ歸ル。

午後一時五十分ノ瀛車ニ就キ、「リエス」ヲ發シ和蘭ニ向フ。途中過クル所廣漠タル砂地多シ。和蘭領ニ入ル、最も甚シ。砂地ニ往々松樹ヲ植ユルヲ見ル。「ボキステル、チルヒユルグ、ブレエダ、Rottendam」等ノ各所ヲ過キ、八時和蘭ノ首府「ハーグ」ニ著ス。「ベルビウ客舎」ニ投ス。

初メ和蘭領ニ入ル。途中、平坦ノ地ハ皆悉ク卑濕ナリ。處々〔^補ニ〕牛・馬・羊ヲ牧畜〔^削ヲ見〕「ズルモノアルヲ見ル。案スルニ、土地多クハ皆卑濕ニシテ耕作ノ用ニ適セス。故ニ代ユルニ牧養ヲ以テスルナラン。牛・羊ハ蓋シ皆食用ニ供シ、年々英國及ヒ其他外國ニ輸出スルモノ甚タ多クシテ、耕作上ノ所得ト比スレハ多キコトアルモ決シテ少ナキコト無シト聞ケリ。

西洋諸〔^訂國〕〔^削洲〕、大率ニ皆〔^削節儉〕財ニ儉ニシテ業ニ勉ムト聞ケリ。殊ニ和蘭ノ風最も節儉ヲ勉メ、人モ亦質朴ノ風ヲ存シ、自カラ平穩ノ象アルヲ覺ユ。

夜、シーボルト氏〔^訂□〕〔^削ト〕市街ニ散步ス。

八月十五日 晴。午前シーボルト氏ト總裁ニ隨ヒ、先ツ議院ニ至リ議事堂ヲ觀ル。規模廣大ト云フニ非サレトモ頗ル清肅、自

カラ形ヲ改ムルノ勢アリ。議院ヲ出テ古昔牢獄ノ遺跡ヲ見ル。罪人ノ頭ヲ斷チ、及ヒ罪人ヲ直立セシメ頭上^訂「□」(ニ)「□」一滴ノ水ヲ落シ、千萬滴ノ後頭遂ニ頭腦ヲ滴破シテ死ニ至ラシムル等ノ處ヲ見ル。當時、歐洲殘酷ノ刑^補(アリシコト)想フ可シ。

正院・左院・内閣等皆一^訂「□」所ニ在リ。又、電信局・内務省モ皆其側ニ在リテ、何レモ古昔ノ城郭ヲ修理シタルモノト聞ケリ。

其内部ノ縱覽ヲ得サレトモ、外部ハ^訂「整頓」皆能ク整頓シタルヤウ見受ケタリ。市中處々ニ溝洫アリ。汚水凝滯シ流レス。^訂「□」

水殆ント地ト齊シ。處々ニ又公園ノ設ケアリテ、鹿及ヒ羊ヲ放チ養フ。街衢ノ兩側ニハ多ク樹木ヲ栽ユ。鐵道馬車亦盛ナリ。聞

ク、鐵道馬車ハ亞米利加人ノ發明ニシテ、現今歐洲各國皆其制ニ倣ヒ、首府ハ勿論小都ト雖トモ人戸稍稠密ノ處ニハ必ス此設アリ

テ以テ來往ノ人ニ便ス。其貨錢^訂「極メテ廉ナリ」ハ^訂「每都」(各處)ニ於テ小異同アリト雖トモ、^補(大抵)五錢乃至六錢ノ定メナ

リ。^訂「ア(ル)」(ン)「ベルス」府ノ實況ヲ聞ク(ニ)、鐵道馬車會社カ一ケ年ノ所得ハ凡ソ六割ニ當ルト云フ。是レ亦各都府ノ繁

華ニ應ジテ小異同アルヘシト雖トモ、其會社ニ利アツテ稠人ニ便ナルヤ各處皆同シト云フ。初メ巴里府ニ於テ此設ケアルヤ、^補(從

來ノ)乗合馬車會社ニ於テ非常^訂「□」(ニ)苦情ヲ唱ヘ、種々難題ケ聞布^訂「ハ」(コト)ノア^訂「ル」(リ)タルモ、遂ニ馬車鐵道ヲ設ク

ルニ當リテ^訂「豫メ」豫想セシトハ大ニ相違シ、乗合馬車ノ乘客ニハ決シテ^訂「差」(多)少ノ差響ヲ生セス、兩會社共ニ利益ヲ占メ、

衆人ハ爲メニ二倍ノ便利ヲ得タル姿ニテ先キニ苦情^訂「ノ」ヲ唱ヘシハ實ニ餘計ナル心配トナリタルトカヤ。惣テ何事ニ依ラス、歐洲ニテ古來ノ風習ヲ改メ新タニ業ヲ創ムルニハ、種々ノ^訂「障礙」

(苦情)ヲ來タシ、容易ニ實施スルハ難キナリ。況シテ我國ニ於テ二千年來ノ舊習ヲ脱シ、諸事萬般新奇ノ事ノミヲ施行スルノ今

日ニ在ツテ、往々頑愚ノ說ヲ唱^訂「ヘ」(フル)「ハ誠ニ可」モノアルハ其實慨ス可キモ、之レヲ歐洲人民カ風俗・慣習ヲ變換スル

ノ頑愚ナルニ比スレハ廻カニ^訂「速カナル所アリテ、又、却テ輕躁ノ弊無キ能ハス」慧敏カト思フノ感アレトモ、熟ラテ考フレハ、

文學・政治・藝術等ヲ除キ風俗^補(又ハ)慣習^訂「等」ヲ輒スク改ムルハ、其弊輕躁ニ流レテ言フ可カラサル禍害ヲ招クノ恐レアリ。

深ク思ハサル可カラス。左ハ云ヘ、^訂「鐵道□」馬車鐵道ノ如キ之レヲ今日我東京府下ニ設クル^訂「ノ如キ」ハ、^訂「最モ」(又)有益

ノ一ニシテ決シテ猶豫ス可カラス。^訂「如シ此設ケアルニ臨マハ、又、必ス種々ノ」其便利等今愛ニ^訂「側」贊辨セス。

和蘭ハ有名ノ卑濕地ニシテ、^訂「或ハ海面ヨリ」土地ニ寄リテハ或海面ヨリ低キ處モアル由。^訂「當府下モ亦」地^訂「□」(ノ)卑濕

ナル固ヨリ健康ニ害アリ。殊ニ溝洫ノ水、汚穢流^訂「レ」ス、空氣カサル等^訂「レ」ス、大氣ノ腐敗實ニ想フヘシ。去ルカ故ニヤ、和蘭ニ

限リ毎戸一週聞ニ^訂「二」(一)回乃至二回程、必ス窓戸ノ硝子ヲ洗ヒ磨クノ風習アリ^訂「□」。室内ノ掃除モ之レニ準^訂「シ」^訂「セリ」(シテ)能ク行キ届クト云ヘリ。且又、一般ニ酒ヲ好ムノ風ア

リ。到^コル處^ニ（ノ）酒^{サケ}店^{テン}ニハ客^{キヤク}常^{ジョウ}ニ満^ミチ、樽^{ソン}中^{チュウ}ノ酒^{サケ}モ亦^モ空^{カラ}シカラサルヤウ思^{オモ}ハル。酒^{サケ}ハ尋^{ゾク}常^{ジョウ}ノ麥^{マク}酒^{ジュ}等^トヨリ燒^{ヤク}酎^{チュウ}等^ト氣^キ烈^{リツ}ノモノヲ多^{オホク}ク用^{ヨウ}ユ。是^{コノ}レ蓋^{フタ}シ空^{カラ}氣^キノ惡^{アク}キカ爲^ナメ（ニ）健^{ケン}康^{コウ}ヲ補^ホフノ弊^{ヘイ}、遂^{スガ}ニ風^{フウ}習^{シツ}トナリタルモノナラン。

又、烟草店甚タ多く、且ツ價モ甚タ廉ナリ。小兒ト雖トモ補（亦）皆吸烟ス。

午後一時歸寓。二時半ニ至リ又出テ、公園ニ至リ陸軍樂隊ノ奏樂ヲ聞キ、三時半歸寓シ、^(前)「命シテ」店主ニ命シ馬車一輛ヲ買ヒ、三人同乗シテ「スケープ・ニング」ニ赴ク。此地ハ海岸ニ在リ。府ト相距ル凡ソ一里^計「アリ」(半)。暑中海浴ノ處トス。車道ハ一直線ニシテ樹林ノ間ヲ行ク。風景頗ル佳ナリ。「スケープ・ニング」

ハ「（め）一村」海邊ノ小一村「（た）ナリ」（落）ニシテ、（其風俗）人皆古
來ノ「（訂）風」（俗）習ヲ改メス、一種ノ風アリ。婦人ノ頭上ニハ兜形
ノ冠ヲ戴ク。皆、後ロヨリ前ニ當ツルノ製ニシテ、兩鬢ニ釵ヲ著
ク。冠ノ上ナルモノニハ金ヲ用ヒ、下ナルモノハ銀ヲ用ユ。一家
ノ産、悉ク一婦人ノ頭上ニ集マルト謂ヘキナリ。又奇ト謂フ可シ。

夏時、海水ノ浴客極メテ多シ。随ツテ茶店・旅店玆雜貨店等觀ル可キモノアリ。（補○印にて欄外より）（又、音樂場ノ設ケアリテ、（訂）「前面」（其周圍）ニハ數百個ノ椅子ヲ散置シ、聽客ノ用ニ供ス。）海浴ハ常ニ午前ニ在リ。午後（補）「ハ皆」四、（五時）ノ頃ヨリ衆客皆海邊ニ逍遙シ、新鮮ノ空氣ヲ（訂）「呼吸シ、或ハ音樂ノ設ケアリ」（吸ヒ、微妙

「谷謹一郎と巴里万国博覧会」(岩壁)

ノ音聲ヲ聞キ、以テ快ヲ取り歡ヲ盡ス。〔亦、一個之レヲ〕亦
一個補（自然）ノ好養生地ナリ。此府ニシテ削〔如シ〕此好養生地
〔徵セハ、夏時炎蒸ノ時ニ當ツテ府民ノ□□果シテ如何ントヤ〕
ア訂〔□□〕（リ）。是レ亦造化主削〔□□〕乘除訂〔ト其〕（ノ）妙處ト
謂フヘキナリ。晝、皆歸寓。夜、又公園ニ至リ樂ヲ聞ク。聴者殊
ニ多シ。

八月十九日
曇。

(四) 仏国事務官長カランツ氏略歴

大藏大輔松方正義公ノ博覽會事務副總裁ノ任ヲ兼帶シ巴里府ニ來リシヤ本年三月ノ末ニ在リ。爾後、百般ノ事情微意ヲ注シ、耳ヲ傾ケ、常ニ有名ノ士人ト交際シ、虚心平氣以テ其說ヲ叩キ、其論ヲ探リ、或ハ多年公カ實驗セシ所ノ事山ヲ説キ、彼此相討論シ以テ公カ識見ヲ廣クシ、公カ平常疑塊ノ^(邊)團結シテ解ケサルモノ釋然春水ノ如キ^(訂)〔モノ〕(アル)、蓋シ鮮少ナラス。本會開場中、各國ノ出品ニ就キ注目殊ニ至レリ。其農產物ノ盛ナルモノアルヲ見テハ常ニ慨然トシテ感觸シ、覺ヘス聲ヲ放ツテ快ト呼フモノ數回ニ至レリ。而シテ時アツテハ則チ曰ク、外國何ゾ獨リ斯クノ如ク盛ニシテ何ゾ我國農產ノ微々トシテ起ラサルヤ。之レヲ見ル愈々屢々ナレハ感ヲ起スコト愈大ナリト。其意ヲ國家勸農ノ急務ニ

用ユルノ親切ナル率ネ是ノ如キナリ。曩キニ余カ東京ヲ發シテ以來、常ニ公ニ陪隨セリ。故ニ「能ク」公ノ説ク所ト公ノ論スル所ト常ニ能ク耳底ニ充塞ス。本年八月ニ至リ、本會開場既ニ半ハヲ過キ、事務漸クニ調理セリ。於是乎、公將サニ歐洲各地巡行ノ事アラントス。余カ不敏ナル公能ク之レヲ容レテ棄テス。又隨行ノ命ヲ得タリ。同月十一日、輕裝巴里府ヲ發シ、先ツ白耳義ニ至リ、和蘭ヲ過キ獨乙ヲ經、遂ニ瑞西ニ入り、九月廿五日、再ヒ巴里府ニ歸ル。前後日ヲ經ル四十六日、各地巡行ノ間、工業ノ事業ハ論無ク、風土・民俗等視察至ラサル所無シ。余カ不敏ナルモ、公カ憂國ノ厚キニ感セシモノ一ニシテ足ラ「ス」(サルナリ)。近頃、余一日公ノ側ニ在リ。公、突然トシテ余ニ語ツテ曰ク、巴里府著以來殆ント周年ノ長キニ及ヘリ。而シテ(其)愉快ナルコト未タ昨日ノ如キアラサリシト。余、恠ンテ其故ヲ問フ。公ノ曰ク、足下モ亦彼ノ「カラランツ」氏ヲ知レリヤ。我昨日同氏ヲ訪ヒ、談鐵道ノ事ニ及ヒタリ。其説ク所、我カ言フ所ト恰モ相符合セリ(ト)。余、仍テ其顛末ヲ聞カンコトヲ請ヘリ。公ノ曰ク、我ノ問フ所云々、彼ノ答フル所云々。我レノ問フコト是ノ如クナレハ、彼レノ答フル乃チ是ノ如シ。之レヲ如何ンゾ愉快ト言ハサルヲ得ベケンヤト。余「モ」(、之レヲ聞キ)亦掌ヲ拍ツテ喜ンテ曰ク、鐵道ノ事、公ノ最モ注意スル所。既ニ此間アリ。又、此ノ答アリ。豈ニ所謂道聽途説ニ附スルニ忍ヒンヤ。顧クハ其顛末ヲ筆記セン。公ノ曰ク、好シ、足下暫ラク勞セヨト。余、乃チ鉛

筆ヲ懷ニ探リ、隨ツテ聞キ隨ツテ筆ス。遂ニ左ノ一篇ヲ成セリ。篇成ル、通覽スルコト數回「スルコト」、大ニ其論ノ持重ニシテ其説ノ我國ニ切ナル所以ヲ詳ヒラカニセリ。公ノ愉快ト稱スル亦宜ヘナル哉。嗚呼、鐵道ノ我國ニ於テ急務ナル今日ノ如キアラサルナリ。余、今幸ニ此事ヲ記ルセリ。他日果シテ我國従事者ノ參觀トナルヲ得ハ、公ノ稱シテ愉快トナセシモノ必ス今日ヨリ大ニシテ、且ツ甚シキモノアルニ至ラン。豈ニ亦愉快ナラスヤ。

此文ヲ結フニ當ツテ附スルニ「カラランツ」氏カ略傳ヲ以テス。蓋シ同氏ハ佛國有名ノ建築學士ニシテ、現今元老院ノ議官トナリ、博覽會事務官長ヲ兼任セリ。其人トナリヤ沈毅ニシテ大度アリ。人、其技量ヲ窺ヒ知ル能ハス。其言フ所、持重適實、毫モ疏率ノコト無シ。讀ム者、左篇ニ就テ見「□」(ルコトアラ)ハ、決シテ我言ノ誣フルニ非ラサルヲ知ルニ足ラン。

略傳

カラランツ氏ハ、千八百十七年一月十七日佛國ジベール村ニ生ル。Ecole Polytechnique長スルニ及ンテ巴里府ニ出テ、先ツ諸藝學校(原名ポリーテクニク)ニ入リテ修學セリ。千八百三十八年卒業ノ後再ヒ橋路學校ニ入リ、同四十三年ニ二等技師トナリ、六十四年ニハ進ンテ一等技師長トナル。退校ノ後、千八百七十七年ノ二月ニ至リ再ヒ橋路物檢査官ノ職ニ命セラル。抑モ同氏カ鐵道橋梁等實地建築ノ功、前後校擧ニ遑アラス。其最モ著名ナルモノハ、千八百七十年巴里府重圍ノ

變アルニ當ツテ選マレテ外郭防禦ノ建煉ヲ替セリ。同年十二月

マルヌ河ニ橋ヲ架シ、「ゼネラル、ジクロー」ノ兵ヲ渡タセシ

ハ偏ニ同氏ノ功ニ是レ依ル。其以往千八百六十七年^(ノ)博覽會

場、及ヒ本年ノ會ニ於ケルモ其結構建築等共ニ皆同氏カ監理スル

所ニ係ル。初メ同氏ハ聖奴州ノ代議士トナリ、共和黨中ニ介立シ

〔テ〕能ク其地位ヲ保シテ動カス。凡ソ土木ノ工事ニ關スル大議

アルトキハ、必ス氏ヲ選ンテ委員トナセリ。代議士トナルコト凡

ソ五年、千八百七十五年轉シテ元老院議官トナレリ。是レヨリ先

キ千八百七十年、佛國政府、氏カ功勞ノ多キヲ賞シテ勳〔五〕

〔三〕等ニ敘シ、本年更ニ勳二等ニ敘セリト云フ。

前大統領チエール氏ノ世ニ在ルヤ、氏ヲ擧ケテ工部卿ト爲サン

ト欲シ、私カニ之レヲ氏ニ謀ル。氏ノ曰ク、工部ノ事限リアリ。

不佞、敢テ屑シトセス。願クハ常ニ閣下ノ左右ニ在^訂〔ツテ〕〔リ〕

天下ノ大事ヲ議スルニ當ツテ大ニ翼賛スルコトアラント欲セリ。

然^訂〔シテ〕〔ルニ〕不佞ヲシテ獨リ工部ノ任ヲ負ハシム^補〔ルハ〕、

是レ閣下カ不佞ヲ知ラスシテ不佞ヲ棄ツルト一ナリ云々。其國家

ノ大事ヲ以テ自ラ任スル^補〔ノ〕厚キコト是ノ如シ。記シテ此ニ至

ル。案ヲ拍ツテ絶叫ス。

明治十一年十一月廿七日、巴里府寓居ニ識ルス。

谷 謹一郎

〔谷 謹一郎と巴里万国博覽會〕〔岩壁〕

カラントツ氏日本鉄道施設論

(五)

〔明治十一年十一月十九日及廿六日、松方總裁ト議官カラントツ

氏ト鐵道建築ノ説ニ付^訂〔應〕〔問〕答ノ大略〕

十一月十九日松方總裁、前田事務官長ト共ニ議官兼博覽會事務

官長カラントツ氏ノ私邸ヲ訪ヒ、同氏ト相見ル。總裁先ツ左ノ意ヲ

述ヘテ曰ク、〔過日ハ〕博覽會モ^補〔去十日限リニテ〕滞リ無ク閉

會トナリ定メテ御安息ノ事ナルベシ。開場中ハ限リ無^訂〔ク〕〔キ〕

御懇篤ノ情誼ヲ仰キ、我國ノ都合十分ニ宜シク相運ヒ、閉會後ノ

事務〔モ〕最早夫々取纏メ、去十五日事務委員モ既當府ヲ出立セ

リ。仍テ不取肯御挨拶トシテ罷リ出タリ。何卒諸員ハ貴君ヨリ

然ル可キヤウ御通達被下度云々。

カラントツ氏曰ク、厚意具サニ拜承ス云々。授手、承ハルニ〔此

度〕〔眞夏ノ頃〕貴君ニハ歐洲各地御巡行アリシ趣、就テハ右御

巡回中各地ニテ貿易ノ景況、工業・農事ノ有様等定メテ御目撃ノ

コトナルベシ。今日ノ如^補〔ク〕各地共^補〔其盛大ノ有様ニ至リシ原

由ハ、果シテ何物ニシテ何ノ點^補〔ニ在〕リシト御注目^訂〔アリ〕

〔ナサレ〕シヤ。

總裁曰ク、右巡回モ僅々ノ日數ナレハ確乎ト御返事致シ難シ。

併シ、右巡回中最モ感觸シテ至要至緊ナルモノト認メ、各地盛大

ノ原由ナルベシト想像セシモノ一事アリ。他ニ非ス。即チ、鐵道

是^訂〔リ〕（レ）ナリ。斯ク想像セシ所以亦他ニ非ス。熟々各國諸製造場ノ起源、貿易ノ盛ナリシ時期、農業ノ開ケタル年月トヲ考ヘ併セテ、鐵道創築ノ年數トヲ〔釋^訂〕（守）タルトキハ各地トモ今日ノ如ク貿易・工業・農事ノ盛ナル〔モ〕（ヤ）皆鐵道開設以後ノ事ニコソアレ。是レニ據^訂〔ナハ〕（リテ）運輸ノ便起ラサレハ農工ノ業決シテ盛大ナラサルノ理由ヲ知レリ。就テハ我日本國ノ如キ海運ノ便ナルハ固有ノ事ト雖トモ、内地ニ工農ノ事業ヲ起コシ盛大ナラシムルニハ、大ニ陸路ノ便ヲ開キ鐵道ヲ設クルニ如カサルノ所以ヲ實驗セリ。

彼曰、至極御尤ノ御目込ミナリ。實ニ歐洲ト雖トモ現今ノ如ク農工商事ノ盛ナルハ勿論、百事ノ進歩セシ〔ハ〕（モ）皆鐵道開設以來ノ事ニ係レリ。我佛蘭斯國ニ於テハ益十分ノ盛大ヲ謀リテ自今二十ヶ年ノ間ハ盛シニ鐵道ノ建築ニ著手シ、運輸ノ便ヲ盡クサント決セリ。今、貴君ノ著目セラレシ所、誠ニ緊要ノ事ト思考ス。抑モ運輸ノ便ハ水陸相待ツテ開ラカサルヲ得ス。然レトモ今〔日本國ノ〕地圖^補（上）ニ據リ日本國ノ爲メニ考察スルニ、凡

ソ日本國ノ河川ハ重モニ瀧川ナルヤニ思ハル。因テ其便ハ水車ヲ設クニ在リテ、強テ運輸ノ便ヲ謀リテ著手スルハ恐ラク無益ニ屬スルナルヘシ。尤モ川脈ノ便不便ニ寄リテハ運輸ノコトニ著手セサルヲ得サルハ勿論ナレトモ、只不便ノ場所ヲ強テスルハ惡シ^訂〔□〕（キナリ）。是レ迄^削〔御〕懇篤^訂〔ノ〕（ニ）御接遇アリシコトナレハ、微力ナガラ右鐵道ノ事ニ付聊カ鄙見ノ廉申述フベ

シ。先ツ鐵道建築ノ第一要点ハ線路ノ測量ヲ精微ニナシテ其事ヲ速定スルニ在リ。線路定マラサレハ後ニ至リテ甚シキ差支ヲ生スルコト〔アリ〕^訂（多シ）。故ニ今、日本^補（全）國ノ地圖ヲ借覽シ熟考ノ上篤ト見込ノ廉申述ヘ〔シ〕^訂（シ）。併シ、只〔地圖ニ依リテハ〕大體ノ事ノミ。精細ノ事ハ實地ニ就キ熟按スルニ非サレハ逆モ能ハサルコトナリ。

總裁曰ク、誠ニ幸ヒノ至リ〔ナリ〕^削。地圖ハ明朝御送附致スヘシ。

彼曰、地圖熟覽ノ上鄙見申述ヘ度ニ付テハ、次週火曜日午前第十時ヨリ御來臨玉ルベシ。

右ニテ十九日ノ應接ハ了ハリ、來火曜日再會ノ事ヲ約シテ總裁ハ辭シ去ラル。期ニ及ヒ〔總裁ハ〕^削再ヒ同氏ヲ訪ヒ左ノ應接〔ヲナセリ〕（アリ）。實ニ十一月廿六日ナリ。遠野寅亮、之レカ通辨トナル。

カランツ氏日本地圖ヲ披キテ曰ク、此地圖ヲ展閱スル^補（コト）數回。篤ト地形ヲ察シ熟按スルニ、海邊ノ地方ハ固ヨリ海運ノ便アレハ急速ニ鐵道ノ著手ヲ要セス。山國ハ自カラ物産モ多ク、隨テ最モ運輸ノ便ヲ要スベシ。故ニ先ツ全國ノ中部ニ就キ著手スベシ。第一、東京ヨリ武州上州ヲ貫スキ信州ヲ經テ近江ノ湖水ニ沿ヒ大坂迄ノ線路ヲ速カニスベシ。次キハ、信州ヨリ新潟マテ、新

鴻ヨ〔テ〕（リ）〔東〕青森ニ接續スベシ。尤モ東京ヨリ奥州ヲ經テ青森ニ達スルモ可ナリトス。是レハ實際ノ便不便ヲ考ヘテ設クヘキナリ。兎ニ角ニ日本ノ地形ハ豎ニ長クシテ横ニ狹シ。故ニ全國ノ中心ヲ貫通スル（ニハ）豎〔ノ〕（ニ一）道〔路〕ハ二條（乃チ一）道）丈ケニシテ（ヲ設クレハ）可ナルベシ。且ツ線路ヲ（設クルハ）通スルニハ成丈ケ河水ヲ避クベシ。河水（アルハ必ス橋梁無キヲ得ス。橋梁ヲ築クニハ多費ヲ要ス。加之、屢々破壊シ修繕スルノ憂ヒアリ。故ニ大坂迄ノ線路ハ必ス前説ノ如クナスベシ。地形ト云ヒ、山脈ノ模様ニ就キテ考フルモ最モ適當ノコトト思ハル）。

總裁曰〔ク〕、〔至極〕御尤ノ〔貴〕説ナリ。愚按ニテモ我國ノ地形ハ東西ニ長キ故、必ス中心ニ一直線路ヲ貫通スルノ見込ミナリ。全體海邊ノ地方ハ貴説ノ如ク固ヨリ海運ノ便アリ〔。且ツ〕（ト雖トモ、今）萬國ト交通ノ事ナレハ、將來萬一外國ト戰爭ノ事起ル時ハ（四方ノ）海〔邊ノ〕（面ハ）〔地方ハ〕盡ク戰地ト見做サ、ルヲ得ス。隨テ内地人民ノ爲メ運輸ノ便ヲ失フハ勿論ノコト、兵隊運送ノ便甚タ不都合ナルベシ。仍テ中心ノ線路ハ獨リ大坂迄ニ限ラス、中國ハ勿論、西ハ九州東ハ青森迄斷然設ケサルヲ得ス。其他縱横ノ支線ハ漸次開設スベキノ見込ミナリ。要スル（ニ）中央ノ本線（先ツ）〔備成〕スルトキハ、支線ハ自カラ人民ノ志願ニ依リテ速カニ著手ノコトニ至ルベキカ、斯ク申ス時ハ

〔谷 謙一郎と巴里万国博覧会〕（岩壁）

更ニ會計上等ノ事（等）ヲハ舍テ（不）問〔ハス〕（ニ附シ）、急遽倉卒ノ論ナルカ如シト雖トモ、決シテ然ラス。貴説ノ如ク〔先〕大事ヲ起スニハ必ス豫シメ其目途ヲ定ムベシ。先ツ第一ニハ線路ノ推測ヲナシ、第二ニハ鐵路ノ憲法ヲ定メ、第三ニハ政府ノ保護法ヲ設ケ、以豫シメ人民ニ告示スルコト至要ノ事ト思ヘリ。貴説如何。

彼曰、固ヨリ然リ。

〔總裁曰、鐵路ノ建築ハ〕（△印にて欄外）〔總裁曰、前論ノ如ク〕〔先ツ〕中央

ノ大線路ハ武州上州信州〔□〕、乃チ中山道ニ依リテ著手云々、貴説具サニ領セリ。我國ニテモ既ニ此説アリ。又、一説ニハ東京ヨリ〔駿〕（相）州〔ヲ過キ〕駿州〔ヲ經〕、乃チ東海道ヲ貫通シテ大坂マテ達スベシトノ論アリテ、兩説區々是非判シ難シ。後説ニ就キ貴意如何御思慮ナサルヤ。

彼曰ク、〔否ラス、否ラス。〕後説、甚タ宜シカラスト思ヘル。請フ其説ヲ申シ述ヘン。〔如シ〕東海道ニ〔大線路依リ〕沿ヒ大線路ヲ設クルモ、無事平和ノ時ニ在ツテハ甚シキ差支ハ有ルマシ。去リ乍ラ、萬一外國〔カ〕戰爭ノ事起ルトキハ、忽チ言フ可カラサルノ禍害ヲ受クベシ。海〔邊〕岸最近ノ線路ニハ敵船ノ彈丸必ス達スベ〔シ〕（キカ）故ニ、之レカ爲メ別ニ保護ノ兵ヲ設ケサルヲ得ス。〔前説ノ勝〕中山道ニ依レハ決シテ是ノ如キ禍害ノ憂ヒ無シ。且ツ地圖上ニ依〔リテ〕（レハ）日本全國ノ地形

〔ヲ察スルニ〕山脈ノ位置等、中山道ヲ最要ノ線路トス。岡ヨリ實地ニ就^削〔思〕考按スルニ非サレハ確言ナシ難シト雖トモ、地圖ニテ全體ヲ論スレハ右患見モ^補〔全ク〕其當ヲ^訂〔得〕〔失ヒ〕タルモノ^訂〔ト〕〔ニアラスト〕信^訂〔セリ〕〔スルナリ〕。尤モ東海道ノ線路トテモ、先ツ中央ノ大線路備成ノ後ニハ必^削〔□〕ス著手スベキハ勿論ナリ。今言フ所ハ、吾大線路ヲ東海道ト定メ、第一ニ著手スルハ甚タ宜シカラスト申ス趣意ニテ候ナリ。爲念申上ク。總裁日、〔勿論ノ事。〕貴意分明^訂〔ナリ〕〔ニ領解セリ〕。卻説鐵道ノ建築ハ全體[↑]〔政府ニ於テスルト人民ニ於テスルト其便否如何。〕

彼曰、内地人民ニテ會社ヲ結ビ著手ノモノアル時ハ此上モ無キコトナリ。兎角、政府ニテ建築スルトキハ、工事粗略ニ陥ルカ、或ハ華美ニ流レテ徒ラニ多費ヲ要スルノ弊アリテ大ニ經濟ナラサルモノナリ。故ニ鐵道ノ憲法ヲサヘ善ク定メタル以上ハ、人民ノ手ニ任セテナスモ政府ノ手ニ於テスルモ敢テ不便不利ノ事アル無し。其憲法ハ政府ニテ豫シメ善ク議定シ、速ニ公布シ置クベキコト肝要ナリ。左モ無キ時ハ、將來ニ至リ甚シキ困難ノ事ヲ生ス^削〔ルナリ〕。尤モ地方ニ寄リ^補〔テハ〕鐵道ノ設ケ無キ能ハ^訂〔スト〕〔サル〕緊要ノ場所柄^訂〔ニテ〕〔アリト〕雖トモ、人民ニ於テ利スル所無ク著手セサル等ノ場所アル時ハ、政府ニテ其利益ノ有無ニ拘ハラス勉メテ著手セサルヲ得ス。右申述フル所ハ政府ト内地人民トノ場合ニ就テ論セシナレトモ、決シテ外國人^訂〔ノ手ニ委

ネ〕〔ニ免許ヲ與ヘ〕其資本ヲ用ヒテ建築ノ事ヲナサシム可カラス。此義ニ付テハ、先年中現ニ佛蘭斯國ニテ英人ニ委ネ大ナル損害ヲ招キタルコトアリ。コレハ拙者カ現ニ承知セシ事故ニ異々モ御忠告^訂〔申上ル〕〔致ス〕〔ナリ〕。實ニ其節佛國ニテ弊害ヲ招キタル^訂〔ア〕〔ハ〕限り^補〔モ〕無^訂〔シ〕〔キコト〕〔ナリ〕〔ニテ〕アリシ。殊ニ萬一外國ト戰爭ノ時ナドニ至リテハ、是ノ如キ鐵路アル^訂〔モ〕〔ハ〕卻テ無キニ勝サル程ノ大害アリ。深ク戒シムベキコトナリ。別ケテ日本國ニ於テ永ク獨立ノ國權ヲ維持スルノ事項中最モ緊要ノ一大點ナルベシ。

彼又曰、前説ノ如ク日本國鐵路建築ノコトニ付、他ニ又一要件アリ。ソハ東西中心ノ大線路ハ必最初ヨリ^訂〔四〕〔二〕線^{乃チ}〔二道〕ヲ通スベシ。其他ノ支線ハ^訂〔二〕〔一〕線^{乃チ}〔一道路〕ナルモ妨ケス。且ツ支線ハ成丈ケ中心線ニ接續スベキナリ。都テ^訂〔線ト線トノ間ノ〕〔鐵路ハ〕大ナルヨリモ寧ろ小ナル方大ニ入費ヲ減ス。^補〔獨^{△印にて欄外}リ是レノミナラス、路ノ屈曲・高低自^訂〔山〕〔在〕ニシテ、建築上頗ル便宜ナリ。〕佛國ニテモ自今線路ハ成丈ケ小サキモノヲ用ユベシトノ議論^訂〔□〕〔アリテ〕粗^補〔其議ニ〕一決シタレトモ、拙者ニ於テハ獨リ^補〔其議ヲ拒ミ〕動議ヲ發シテ^訂〔同意セサリシ。其譯ハ〕〔曰ク、佛國ノ鐵路ハ舊來ノモノ皆^補〔盡ク〕大ナリ。故ニ〕今更ニ小線路ヲ設クル時ハ大ニ不便ヲ生スルノミナラス、佛國^削〔ハ〕固ヨリ海^訂〔ニ遠シ。故ニ〕〔運ノ便ニ乏シク〕、内地ヨリ巨大ノ物資ヲ運送スル甚タ不便^訂〔ナリ〕〔ナラスヤ〕。〔旁^訂

止ムヲ得ス」(故ニ寧ロ)舊來ノ線路ト同様ナルモノヲ用ヒ「サ
ルヲ得ストノ説ヲ唱ヘタレハ、遂ニ其説ニ決定セリ」(テ全國同
軌トナサ、ルベカラス。是レ勢ノ止ムヲ得サル所ニシテ、(將來)
(永ク)便利ヲ將來ニ謀ルモノト謂フベシ云々。於是前議遂ニ破
レ、更ニ愚「意」(見)ノ如ク議定セリ。(佛國ニ於テスラ猶小
線路ノ利益タルニ著目シテ「改正ノ」(〇〇)議起ル程ナ(〇〇)
レトモ、實際ニ不便ナ「レハ〇〇」ルカ故ニ、不得止「前論」動
議ヲ起セシナリ。」然レトモ日本國「ノ爲メ」(ニハ未タ十分)ニ
謀ルニ(鐵路ノ設ケア(ルニア)ラス。且ツ)海運ノ便アルヤ佛
國ノ如キ不便ニ(モ)非ス。故ニ巨大ノ物資ハ皆海運ニ依レハ決
シテ差支ユルコト無カルベシ。(小線路最モ適當セリ。)且ツ鐵路
(及ヒ)停止場等ノ建築ハ成丈ケ質素ニシテ虚飾ニ陥ルベカラ
ス。現ニ歐洲中瑞西・那威其外皆小線ノ鐵路ヲ用「ヒ」(ユ)ル
コトニ至レトモ、敢テ不便ノコト無ク、不都合ノコトモ無シ。仍
テ線路ハ勿論、列車ト雖トモ勉メテ實際ノ便否ヲ考ヘ虚飾ス可カ
ラス。是レ實ニ日本ノ爲メ最モ緊要ノ事ト愚考セリ。且又、汽車
ノ快走ヲ要スルハ(甚タ)惡シ。快走ヲ要スレハ必ス費用多シ。
殊ニ日本國ニ於テハ必シモ快走ヲ要セサルノ國柄ナレハ、併セテ
御忠告申上ルナリ。其他詳細ノ見込ハ昨今事務多繁ノ際十分ニ考
究シ能ハス。仍テ猶熟考ノ上、他日今(一度)御面會「ヲ請ヒ、
其」ノ時「ニ讓ル」。

「谷謹一郎と巴里万国博覧会」(岩壁)

總裁曰、貴説篤ト感佩セリ。拙者滯留中今一度ハ是非共御面會
致シ、詳細ノ高説ヲ仰クベシ。猶、御熟考ノ事、祈望ニ堪ヘス云
々。

右ツツテ雜話アリ。暫ラク(シテ)辭シ去ラル。總裁歸寓後、
谷謹一郎筆記ス。

註

- (一) 谷の日記に登場する日本人の多くは仏国博覧会事務局閣
係者である。同事務局員として渡仏したのは、事務副総
裁兼事務官長松方正義(大蔵大輔兼勸農局長)、事務官
前田正名(内務省御用掛)、同石原豊實(内務一等属)、
同久保弘道(内務省御用掛)、事務取扱平山成信(外務
一等書記生)、同谷謹一郎(大蔵三等属)、同諏訪秀三郎
(陸軍省十二等出仕)、同成島謙吉(内務六等属)、同
三田信(内務省御用掛)、同河原徳立(同)、同大橋靖
(同)、同兼松直樹(同)の以上一二名。これに在仏公
使館員の内から、博覧会御用掛鮫島尚信(特命全權公
使)、事務取扱鈴木貫一(二等書記官)、同河上房申(一
等書記生)らが兼務、それに新任公使として鮫島が赴任
するまで臨時代理公使を勤めていた中野健明(一等書記
官)は事務局先発の前田・大橋兩名のバリ到着まで日本
側代表を兼ねた。また通弁として留学生遠野寅亮が臨時
雇用されている。
- 事務局員以外では、文部省から出品監督と教育調査を
目的に文部大書記官兼太政官大書記官九鬼隆一と文部省
一等属手島精一が、海軍省からは「博覧会御用」として
遠武秀行海軍中佐が渡仏している。

このほか民間人として渡仏し日記にも一部登場するのは三井物産関係者である。三井物産はパリ支店設立や万博出品物の輸送などのため渡仏者も多く、明治一〇年一〇月事務局先発の前田・大橋兩人と共に渡仏した横浜支店支配人坪内安久をはじめ、浅田逸次、田中幸次郎、清水勝兵衛、伊達忠七、益田英作、三井義之助らが渡航している。(仏国博覧会事務局編『明治十一年仏蘭西巴里万国大博覧会報告書』第二編 明治十二年 一頁〜五頁、外務省記録『海外行免状表』第二、第三巻 明治十二年 一頁〜五頁、p.168)

なお仏国渡航者については拙稿『明治十一年パリ万国博覧会と日本の参同』を参照(神奈川県立博物館研究報告人文科学第一二二号、昭六〇)。

(2)

松方、前田、鮫島三名の事務局における職名について仏国側事務局副総裁からの要請を受け、総裁大久保利通は「拙者限り聞届」けるとの条件で、仏国において松方は「総裁」、前田は「事務官長」、鮫島は「総裁心得」の名義を以て事務取扱を行うよう命じたとしている。(「仏国博覧会副総裁其他名唱之儀に付上申」明治十一年二月二十六日『公文録』2A-10-2261, M288 「イタリヤ」p.0031)

(3) 清輝艦の英国来航については以下の史料がその間の事情を物語っている。(国立公文書館蔵『明治十一年清輝艦報告』)

清航第三十八号

ボートモース以来航海御届

去月六日英国「ボートモース」港着艦之上同所艦隊司令長官海軍大将フォンショウ氏の保薦ニ依り本艦ヲ造船所「ゼラー」ニ繋泊仕拙官義ハ直ニ倫敦公使館ヘ出

問又士官等モ交代諸要所見物為致居候処向後交際上之都合宜敷義有之ニ付是非本艦ヲ「テムス」河上ニ進航可致旨公使ヨリ依頼有之候ニ付同十六日ボートモース出艦同十八日「テムス」河「グリーンハイス」着艦投錨仕其後同廿六日別紙御届書之通り艦内ニ於テ諸紳饗応仕候上同三十日同所抜錨同三十一日仏国「セブル」着艦仕候於当港士官等夫々交代博覧会等見物為致且鮫島公使松方大蔵大輔等之保薦ニ從ヒ水兵之内行状正シキ者ノミ拾四五名相撰博覧会等見物為仕候当港碇泊中ハ当国「アドミラル」或ハ在留英国領事ヨリ懇信之取扱ヲ請ケ諸事都合宜敷且艦内一統無事今十二日午後地中海ヘ向ケ当港出艦可仕積リニ御座候条此段御届仕候也

仏国セルブル

清輝艦長

井上海軍中佐

十一年八月十二日

東海鎮守府司令長官

伊東海軍少将

(4) 遠竹は(1)で述べた海軍中佐遠武秀行のことと思われる。

(5) 某氏とは C. de Groote (明治六年十一月着任)のこと。

(付記)

本稿の作成にあたり、桃裕行先生、安岡昭男教授に御教示御協力を得たので、末尾ながらここに感謝の意を表したい。